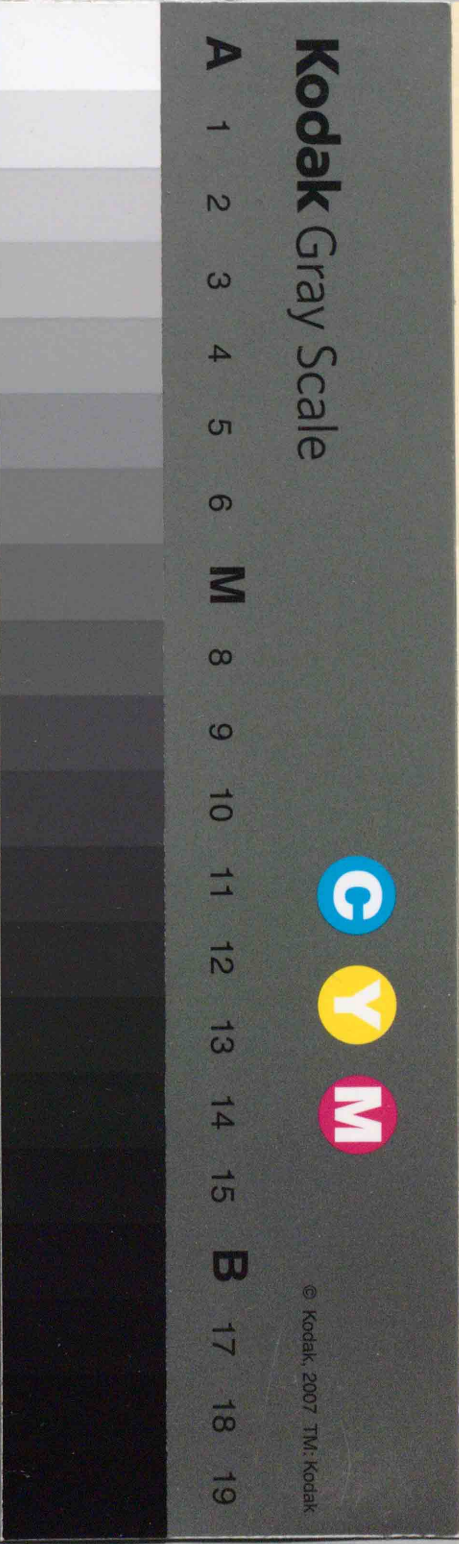
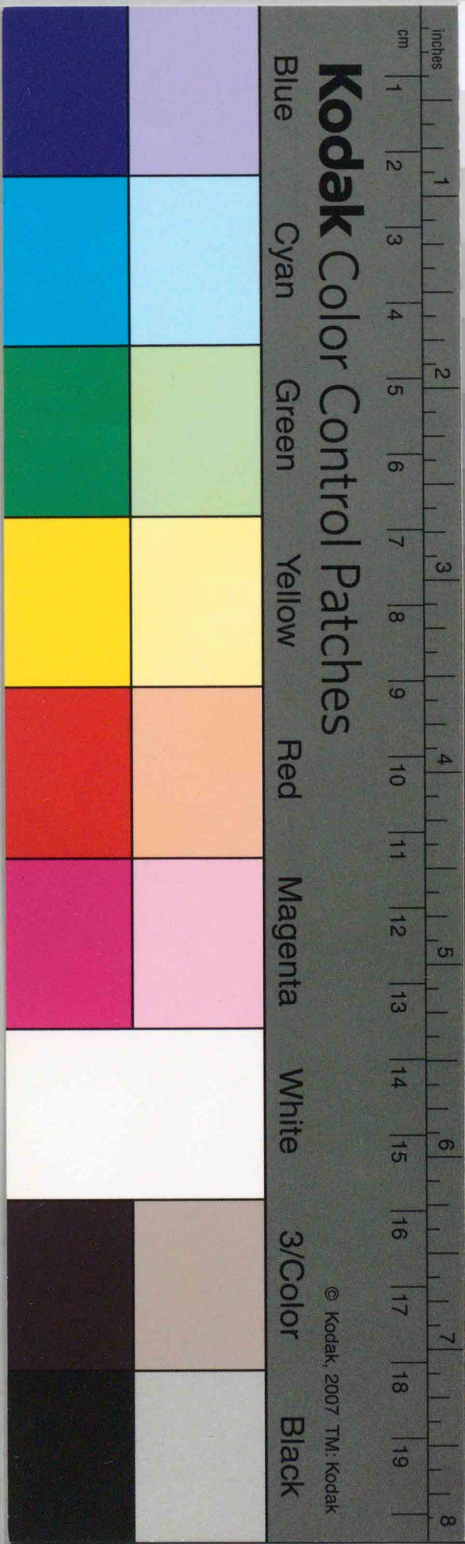
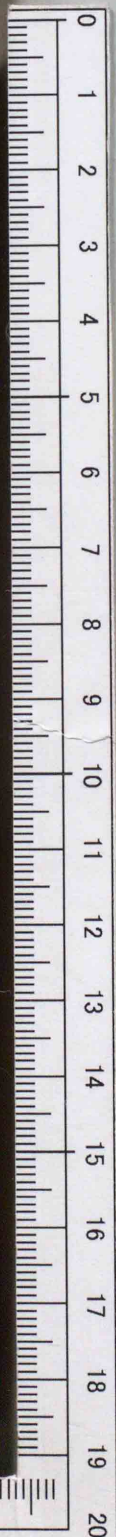


新訂
新撰國語讀本
卷二

3759
Da19
資料室



41525

教科書文庫

4
810
41-1925
200030 1479

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



5217

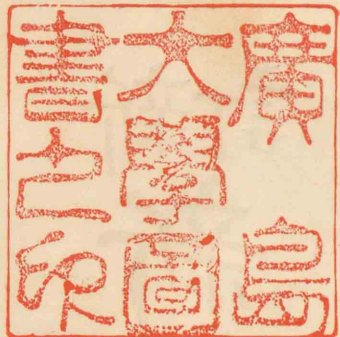
日二十二月一年四十五大
濟定檢省部文
用科語國校學中

新新撰國語讀本

文學博士佐多政編

大町芳衛
武島又次郎
杉敏介
補修

株式會社
明治書院



新撰國語讀本卷二目次

一 辛抱くらべ	松村介石	一
二 競 漕上	久米正雄	八
三 競 漕下		一三
四 夕焼さんぼ(詩)	北原白秋	一六
五 草雲雀	石井重美	二〇
六 懐しの丘	國木田獨步	二九
七 保吉の疑問上	芥川龍之介	三四
八 保吉の疑問下		四〇
九 流血の地	櫻井忠温	四四
一〇 最後の授業上	菊池幽芳	四九

一一 最後の授業下……………五

一二 兎 狩……………徳富蘆花…五

一三 ペンギン……………杉村楚人冠…三

一四 史傳を讀むべし……………大町桂月…七

一五 わが幼時……………新井白石…七

一六 雪……………八六

一七 雪の降る晩(詩)……………西條八十…九〇

一八 年賀狀……………藤井乙男…九三

一九 時 間……………(立身策)…九

二〇 善は易く悪は難し……………福澤諭吉…一〇四

二一 祖 母……………二葉亭四迷…一〇七

二二 安 宅……………坪内逍遙…一七

二三 金ヶ崎……………落合直文…一五

二四 伊勢武者と鶯……………(十訓抄)…一三

二五 茶 話……………薄田泣菫…一六

一、つくり鬚……………一七

二、魚の骨……………一五〇

三、怖い物……………一四三

二六 板 塀……………五十嵐 力…一四

二七 春のおとづれ……………吉田絃二郎…一四

二八 うれしさ……………幸田露伴…一五

二九 思ひ出の國上(戯曲)……………楠山正雄…一五六

三〇 思ひ出の國中……………一六

三一 思ひ出の國下……………一七



新訂新撰國語讀本卷二

一 辛抱くらべ

人は我慢が肝腎である。ナポレオンも言つた。何でも戦闘は最後の五分間の辛抱で勝てる。と。戦闘のみではない、百事その通りで、こちらが苦しいと思へば、あちらも苦しいのだ。我慢くらべ、辛抱くらべて、勝敗は分れるものである。

ここに北米合衆國の大偉人グラントと言へば、鬼

(→) Grant.
(1822—1885)

(←) Napoleon.
(1767—1821)

將軍と唱へて、南北戦争四年の間に、一度も負けたことのないと云ふ豪の者。この點より言へば、ナポレオンより偉い將軍だ。しかしその自叙傳を繙いて見れば、彼もやつぱり人間で、決して鬼ではなかつた。

ト
ン
ラ
グ
グラントは始めて戰場に出た時、一大隊を率ゐて居たが、こ

はくてこはくて堪らない。併し誰も皆初陣のこととて、顫へて居るのもあり、顔色の青くなつて居るものもあるから、指揮官が顫へてはならないと、大いに我慢



をして力んで行くと、先方からも一隊の敵兵が進んで來た。これを見ると、その軍容の勇しさと、旌旗は空に翻り、銃劍は太陽に閃き、正堂堂と押寄せ來る勢に、一目慄然とする程に恐怖心が起つた。けれども男子一旦死を決して出掛けた以上は、固より退く譯には行かぬと度胸を定めて、此方もどしどしと向つて行くと、最早互に程近くなつたが、雙方とも未だ發砲はしない。一體、臆病な者は、見當も定めず、むやみに遠方から鐵砲を撃つものださうだが、兵法に従へば、なるべく接近してから一齊に礮と撃つのが本當である

さうだ。グラントは兵學校卒業の人であるから、出來得るだけ接近してと考へて、やはり敵を見ざる時の如く歩を進め、恰も恐怖などいふ事は更に知らざるが如く、力みかへつて向つた。すると兵卒どもは驚いて、何と、わが大將グラントといふ人は、渾身皆膽とでも言ふべき人であらうか。われわれは顫が顫へ、手が顫へて、物も言へぬほど怖しくなつて來たが、グラントは一向平氣な顔で進まれる。世に鬼將軍とは實にわが大將グラントの事であらう。と、感服して跟いて行く。グラントの心になつて見ると、なかなか鬼將軍

どころでない。實は怖氣將軍で、怖くて怖くて堪らないのである。まだ接近もしないうちから、幾度か發砲しようかと考へたり、又は愈堪らなくなつて、逃げようかと思つたりして、遂には殆ど目も見えず、耳も聞えぬ位に逆せ上つて、皆無分別がつかなくなつて了つて居たといふ事である。

然るにここに一段面白いのは敵軍の方である。これは南北戦争が終つてからの話であるが、一日、偶然或處で、グラントがこの初陣に向つた時の敵の大將何某に出會つた。處がその將軍の話に、グラント將軍、

實に君の大膽には恐れ入りました。かの何年何月何處の戦に、予は初陣の事とて、おぢおぢ君に向つた所が、一向君は發砲もしない、又更に退きもしない。そこでいよいよ怖氣がついて、よほど我慢はしましたが、とうとう浮足となつて、君にさんざん破られました。まことに君の膽力には恐れ入る。その勇武には辟易しました。と諧謔混りに語り出すと、グラントは大口を開いて、これは實に面白い。拙者も實はかくかく。と、悉く前條の次第を物語り、君が逃げはじめたのを見て、やうやう勇氣を回復した位で、拙者の怖氣は腹よ

り胸に至り、殆ど喉にまで上り、已に息も出來かねようとする有様であつた。と、腹藏なく己が當時の臆病を白狀して、笑ひ興じたといふことである。

勿論、幾度も戰場に出て、千軍萬馬の間を往來してからは、こんな事もあるまいが、初陣の時には如何にもそんなものであらう。さうして見れば、畢竟、少少の辛抱の較べ合ひで、つい勝敗が分れるものだといふことは、眞理に相違ない。どうせ死ぬか生きるかの場合であるから、仕方がないと度胸を定めて、何でも思ひ切つて覺悟をするのが肝要である。これは決して

(一) 山川の末に流るる機殻も身を棄ててこそ浮ぶ瀬もあれ(空也上人繪詞傳)

干戈の戦争ばかりではない。世上は百事戦争である。びくびくして居ると、却て丸に中つて斃れて了ふ。劍術の極意にもある通り、身を棄ててこそ浮ぶ瀬もある。鬼將軍たるグラントでさへも、最初はなほ此の通りであつたと考へて、人生勝利の秘訣を此處より學ばなければならぬ。(松村介石)

二 競漕上

午後になると、晴れたままに風が吹いて来て、應援旗をはたはたと鳴らした。コースには可なり荒い浪

(二) Course. 競漕場。

(三) Uniform. 制服。

(四) 棧橋と端艇との間にありて、端艇に乗移るを便にする方形の船。

が立つた。併し愈僕等の競漕が始まらうとする頃になつたら、珍しい夕風が來た。選手は、皆、樺色のユニフォームを着た。僕は何だか身が緊つたやうに感じた。土堤では、觀衆が一種の尊敬と好奇との念を以て、この樺色の服を着た選手達に道をあけた。

僕等の短艇がまづ拍手に送られて、臺船を離れた。何時もよりは緩かな調子で三十本ほど漕いで、審判艇の差出す綱に繫留した。續いて紫の艇も繫がれた。艇庫と土堤と應援船とから「樺あ」「紫い」などと叫ぶ聲

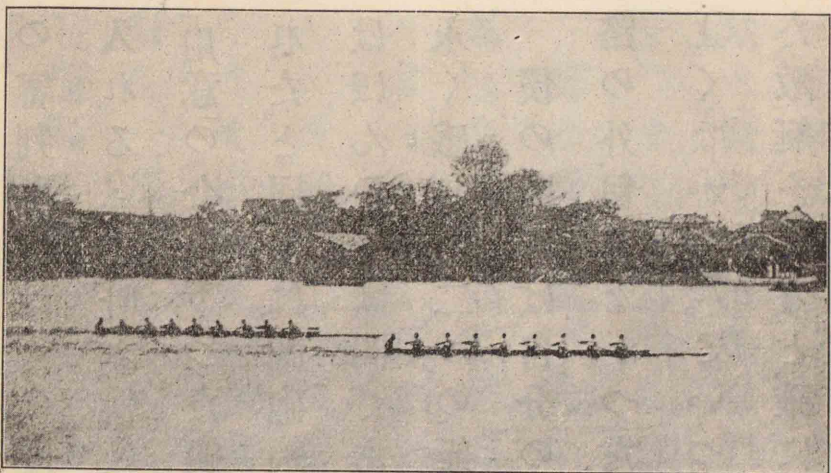
が錯綜して起つた。審判艇は二つの艇を曳いて發足點へ向つた。漕手は艇の中で皆寝てゐた。僕は舵の綱をつまぐりながら、應援の聲を聞いてゐた。

艇は發足點の赤い浮標に着いた。水路を見渡すと風は全く風いで居るのではなかつた。斷えず北東から吹いて來て、艇首を左へ曲げた。僕はそれを直すために、幾度も二番に軽く櫂を入れさせた。艇首を曲げたまま出發しては、只さへ淺草岸へ向きたがる艇の癖を一層激しくするやうなものだ。若し水路を外れて淺瀬を漕いだら、艇脚の止まるのは明白である。岸

隅田川の右岸に屬す。

(二) Seat.
坐席。

の審判所ではその度に、樺の艇が出過ぎたから櫂を入れるな。」と叫ぶ。僕は氣が氣でなかつた。そのうちに「用意の令が下つた。艇首は又一瞬間の強風に曲げられた。」と同時に號砲が響き渡つた。用意と號砲との間はほんの一瞬間であつたには相違ないが、僕は随分永く感じた。二つの艇の櫂は同時に水に這入つた。僕の眼には自分の艇の前方に白く光つて居る水路の外、何もなかつた。身方の艇はどちらも滑り出しがよくなかつた。こいつはいけな。皆、慌てたな。」と思つた。敵艇を見ると、確に一二シートは此方より出てゐ



競漕(隅田川に於て)

るらしい。併し暫くすると、皆の調子が好く合ひだした。この時、競漕中に敵艇を野次るので有名な紫の舵手が、敵艇を抜くこと約半艇身。」と叫んだ。僕は言はせもあへず、嘘だぞ。」と怒鳴つた。今迄だまつてゐた僕は、一度その言葉を言つて了ふと、急に口の緊りが解けたやうな氣がして、恐し

* Splash. 櫂の操縦を誤つて水を跳ねとばすこと。

く雄辯になつた。その中に、敵の三番が大きなスプラッシュをした。水煙が鮮かにぱつと騰つた。僕は機を得たと言はぬばかりに、やつたぞ、あんな大きなスプラッシュを。」と叫んだ。身方一同これに元氣づいて、やつと二つの艇は並んだ。そして水門近くで、身方は約半艇身先んじてゐた。紫の舵手はそれでも、敵はもうへたばつたぞ。」などと言ふ。此方は、なあに、此方が出てゐるぞ。」と野次り返した。

三 競漕下

愈、水門に來かかると、僕は「さあ水門だ。」と敵に先んじて叫んだ。如何なる舵手でも言ふに定まつてゐる場處の指示を、機先を制して叫ぶのも一つの戦術であつた。早く言つた方が、晩く言つた艇より先にその場處に届いた譯だから、遅ればせに、紫は水門で特別な力漕を十本やつた。それで兩艇はまた並んだ。後から追ひつかれると、何だかずつと追抜かれたやうな氣がするものだ。僕の艇は、何だか何時もより艇脚が遅いやうであつたが、暫くすると、又敵艇をじりじりと抜出した。僕は「この調子で。」と叫んだ。敵は沈黙して

(一) Pitch.
調子。

ゐた。渡場での敵の力漕十本も何の効力もなかつた。わが整調は半眼で敵の力漕を見やりながら、やつと安心してピッチを上げ出した。

(二) Last-heavy.
最後の力漕。

洗場では半艇身以上先んじてゐた。併し此處での半艇身くらゐの差では、敵のラストヘヴィが利けば何の役にも立たない。僕は「あと一分だ。死ぬまでやれ。」などと激励した。この「あと一分」といふ練習中に用ひ馴れた言葉が、何よりも選手を元氣づけた。どんなにへたばつてゐても、一分間なら漕げる筈なのだ。併し皆は疲れて來た。すると不思議に艇がよく出

だした。身方の艇は、疲れて來ると各個人の癖が取れて、全體としての調子がよく揃ふ。協力が此の時始めて完全に出來た。整調の權につれて、各は器械的に身體を前後に動かした。

敵のラストも實によく出た。併しそれを僕の氣遣つて居る間に、身方のヘヴィも非常によく利いた。多年の老練で、整調のピッチがぐんぐん上つた。もう十本。決勝線に入る迄は随分永く感じられた。僕はひよつとすると、もう決勝線へ這入つてゐるのに、審判の號砲が發火しないのではないかと思つた。その刹那、

號砲は轟いた。皆は漕ぎやめて、艇内にどつと身を伏せた。その時、僕は嵐のやうな喝采が水上に響き渡つて居るのを始めて聞いた。それは決勝線に近づく時から鳴りやまなかつたのであるが、僕の耳には這入らなかつたのだ。

「どつちが勝つたんだ。」と二番が苦しい息の中から情ない聲を出した。

「安心したまへ、僕等だ。」と僕は答へた。併し僕自身も勝利を確信して居るのではなかつた。何故かと言へば、敵艇は寧ろ僕等の艇よりも前方に、やはり權を流

して浮んで居たのである。が間もなく審判所に掲げられたのは樺色の旗であつた。

喝采はまだ續いてゐた。今までに類のない程の接戦であつたが爲に、敵身方のいづれにも屬してゐない觀衆にまで熱叫されたのである。(久米正雄―學生時代)

四 夕焼とんぼ

大きな赤い蟹が出て

蘭草をちよつきりちよぎります

蘭草の中から火が燃えて

その火が蜻蛉に燃えついた

蜻蛉は逃げても逃げきれぬ

唐黍畑へ逃げて来る

唐黍の頭があこなつた

蓼の花へ飛んでゆく

蓼の花にも火が點いた

野川の薄に留つた

薄の穂さきも火になつた

お庭の鶏頭にやすみませう

鶏頭もいつぱい火事になる

*「赤く」の意。

助けて下され焼け死ぬる

蜻蛉は蘭草に縋りつく

蜻蛉の眼玉は圓ござる

くるくる廻せば山が見え

山の中から猿が出て

あつち向いちや赤んべ

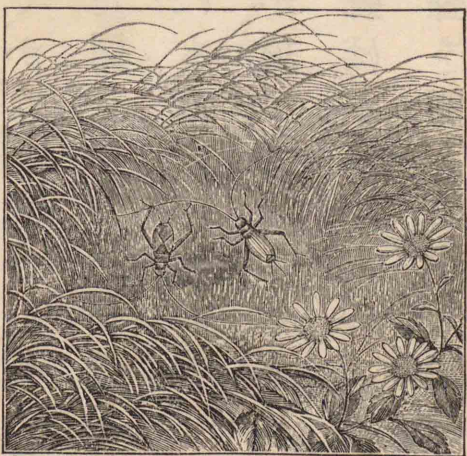
こつち向いちや赤んべ（北原白秋―白秋詩集）

五 草雲雀

ある晩、ふと夜中頃に眼を覺すと、ぢき雨戸の外で、

佳い聲で啼いて居る蟲がある。ちやうど小豆くらゐの、銀の電鈴でも鳴つて居るやうだ。それは蟋蟀と鈴蟲とを一緒にしたやうな聲で、かなり大きい。暫く連續して啼いては一寸休み、また同じやうに何遍も何遍も繰返して啼く。そのほかにも、方方で蟋蟀などが啼いては居るが、それとは聲が違つて居ると、また著しく鋭いので、その蟲の聲ばかり際立つて耳に這入つて來る。寢てゐてその聲を聞きながら想像して見ると、それは何となく青い色をした大きい蟲のやうに思はれた。

翌朝早く庭の掃除をして居ると、縁側に近い扇骨木の葉蔭で、昨夜聴いたその蟲がまた啼いて居る。すぐ近い處で啼いて居るらしいが、どうしてもその所在が分らない。尋ねあぐんで、一寸その邊の葉を動かすと、啼く音ははたと止んで、小さな可愛らしい一匹の蟲が、少し上の方の葉の繁みの中から飛出して來た。蟲は、もとより捕へる暇もなかつたが、ただ體の小さい、觸角の非



雀雲雀

常に長い、蟋蟀のやうな蟲である事だけは分つた。又その翌日になつて、蟲はとうとう家の中へやつて來た。丁度正午少し前で、自分が縁側で新聞を見て居ると、ふと頭の上でその蟲の聲がする。これはと思つて、靜に立上つて四邊を見ると、丁度その時、離れの方へ行く開戸があいて、壁にくつつ着いてゐたが、聲はその壁と開戸との間から漏れて來る。そこで、靜に、怖る怖る、戸を壁から少し離して間を覗くと、蟲は戸の上の方の棧にとまつて、其處で翅を擴げて啼いて居る。戸を僅に開いたばかりで、まだ中が仄暗いので、蟲

の體ははつきりとは分らないが、それでも長い觸角の頻に搖動いて居るだけはよく見える。

だんだん戸をあけてゆくにつれて、その間が明るくなる、と、ヂツといふ音とともに翅を伏せて、聲が止んだ。さうして、蟲は、これは居心地が少し悪くなつたといふ様子で、棧の上を彼方此方と少しづつ歩きたした。よく視ると、蟲の體は黒いやりな茶がかった色で、蟋蟀よりは遙に小さい。

自分は靜に開戸を再び壁の方へ還した。戸と壁との距離が次第に狭まつて、その間がだんだん暗くな

るにつれて、蟲の舉動は再び靜に落着いて來た。さうして暫くすると、また啼聲が其處から流れ出た。

この蟲は、初め、ツリリといふ音を出す、後にはその發音が非常に急激になるから、ただ、リリ、リリ、リリ、リリといふやうに聞える。なほ、啼きだす時には、最初に屢、ツィといふ獨立した音が聞かれる。

その調子は、最初は低く、やがて急に高くなり、それから殆ど同じやうな調子を保つて最後まで續く。そして終には忽然としてその音が切れる。最初、比較的音の緩かである頃、又途中から急に調子の上つ

て行く頃が、聽いてゐて非常に面白い。

啼きだしてから終るまでの時間は、發音が故障なく滑かに進行する時は、一分以上も續くこともあるが、短い時は僅に數秒で終る。また時々、途中で何か故障が出来て、初からやり直すやうなこともある。

一回啼き終つてから、次にまた啼きだす迄には、短い時は、その間に一秒乃至數秒の休息がある。蟲が氣に入つた場處に止つて、十分啼く氣分になつて居るやうな時には、その休息の時間は通常短い。位置を移動する時などは、勿論、かなり長い間、啼かないことがある。

ある。

蟲はその晩になつてから、一夜中、家の中で啼きあかし、翌日もまだ家にゐた。しかも其の日は、廊下から三尺ばかりの入口を探し出して、とうとう書齋の中央まで這入つて來た。さうして、その入口の硝子窓の上のところ、で、長らく啼いてゐた。啼く時には、雲母のやうに光る綺麗な翅が背中に直立して、それが電波のやうに微細に且つ迅速に顫動する。

この蟲は、部屋の中へ這入つて來る時も、出てゆく時も、決して挨拶をしない。全く知らない間に、來たり

行つたりする。又體が小さくて美しい上に、その聲や舉動も極めて靜だから、無論、それが居るために部屋の空気を濁したり、脅したりすることも無い。鴨居でも、蚊帳でも、柱でも、或は硝子戸でも、天井でも、好きな處を氣儘に歩いて、さうして氣に入つたやうな處を見付けると、其處で飽きるまで啼く。この蟲にとつては、垣といふものも、掟といふものも全くない。それでゐて、何の矛盾をも醸さない。

何といふ自由な、粉飾のない、さうして美しい可憐な訪問者だらう。かういふ訪問者は何時來ても可い、

幾ら來ても可い。(石井重美「自然と科學」)

六 懐しの丘

井戸端に行つて、深い山井戸の底から汲上げた冷たい水で身體を拭き、顔や頭を洗ひ、後で釣瓶から直に一口飲むと、それこそ腸にしみわたる。

井戸の屋根から物置の屋根へと葡萄棚が渡してある。その廣い青葉を透して朝日がきらめき、紫の房は累累と珠玉を連ねたやう。

家鴨の一族が鷹揚な雄に導かれて、藪からぞろぞ

ろと出て來た。藪や裏の山の方では、しやんしやんと蟬が勇しく啼きだした。日はじりじりと照りはじめた。仰げば空は今日も高く晴れて、蒼蒼として深碧の色を凝して居る。ああ、夏だ。如何にも夏らしい夏だ。自分は身中に健康の充溢れるのを覺えた。

背戸の柴折戸を出ると、すぐ丘に登るべき小徑がある。丘には一抱以上もある松ばかり樹つてゐて、自分の屋敷を覆ふやうに、高く空を衝いて群り聳えて居る。その丘は、總體で、僅に數百歩に過ぎない狭い面積ではあるが、自分の幼時の楽しい思ひ出の大半は、

此の丘にあるのである。

自分は此の丘で啄木鳥を捕へた、此の丘で捉迷藏をした。朝早く起きて、松茸の得ならぬ香を嗅ぎながら、其處か此處かと茸を探し廻つた事も幾度あつたらう。夕暮には、頂の西部に蟠屈して居る一座の巖に登つて、兩足を垂れて腰を掛けながら、麻里布の浦に沈み行く落日に恍惚として目を放つてゐた事もある。學校友達を大勢引連れて來て、戦争の眞似をした事もある。

或年の秋の初、恐しい暴風が吹きすさんで、戸を破

*
周防國玖珂郡。

り、垣を壊し、葡萄棚を落すなど、大荒に荒れた事がある。其の時、大概の風では倒れなかつた丘の松が、林の端に樹つてゐた二三本は、根から吹倒された。暴風が過去つたあとで、自分は總ての子供の如くに、歡聲を放つて戶外に飛出して、倒れた松を直に見出した。さうして、其の一本が彎曲して橋のやうに横たはつて居るのを見るや否や、下駄を脱捨てて、ちやうど藝人が危い綱渡りでもするやうに、怖る怖る此の橋を渡りはじめた。この様子を父上が見つけて、あぶないぞ、あぶないぞ、と叫ばれたが、其の翌日、父上は木挽に命

じて、此の橋を取除けさせられた。

ああ、懐しの丘よ。かかる果敢ない小演劇も、我が少年の時に於て、寛大なる汝の額を舞臺として演ぜられたのである。自分が都にゐて、種種の事に出會ひ、雑多の思に沈む其のあわただしい間にも、わが魂は、實に幾度か汝の上に飛びしぞ。

丘の頂は平たくなつて、松の根が蛇のやうに其處ら一面に這つて居る。北と西とは小松ばかりだから、かなり展望が利く。自分は子供の時、よく馬乗に乗つて遊んだ御馴染の松の根元に、まづ腰をおろした。さ

りして始めて氣が落着いた。

二日前には東京にゐて、足を爪立て、將來を目がけて、駈足をして居たのである。併し今は故郷の丘に歸つて、松の根元にどつかと尻を据ゑて居る。騒騒しい現から、靜な夢の世界に這入つたと言はうか。それとも、怪しい重苦しい夢が忽然として醒め、長閑な樂しい現の世界に歸つたと言はうか。(國本田獨歩の文に據る)

七 保吉の疑問上

八才か九才かの時、とにかく、どちらかの秋である。

(一) 東京市本所區兩國橋の近くにある寺院。

(二) Boton.(葡)
Button.(英)

陸軍大將の川島は回向院(こ)の濡佛(ぬれぼつ)の石壇の前に佇みながら、身方の軍隊を檢閲した。併し軍隊とはいふものの、身方は保吉とも四人しか居ない。それも金ボタ(こ)ンの制服を着た保吉一人を例外に、あとは悉く紺飛白や盲縞の筒袖を着て居るのである。

もう二昔も前のことで、妙に鄙びた當時の景色はとうの昔に消え去つて了つた。併し、ただ鳩だけは今も同じことである。いや、鳩も違つて居るのであらう。その日も濡佛の石壇のまはりは殆ど鳩で一ぱいだつた。

鑓屋の子の川島は悠悠と檢閲を終つた後、盲縞の懷から一束の畫札を取出した。これは行軍將棋の畫札である。川島は皆に一枚づつ其の畫札を渡しなが
ら、四人の部下を任命した。此處にその任命を公表す
れば、桶屋の子の松井は陸軍少將、菓子屋の子の田宮
は陸軍大尉、小間物屋の子の小栗は唯の工兵、堀川保
吉は地雷火である。地雷火は悪い役ではない。唯、工兵
にさへ出會はなければ、大將をも俘とらひ出来る役であ
る。保吉は勿論得意であつた。が、まん圓と肥つた小栗
は、任命の終るか終らないのに、工兵になる不平を訴

へ出した。

「工兵ぢやつまらないなあ。よう、川島さん。僕も地雷
火にしておくれよ、よう。」

「君は何時だつて俘になるぢやないか。」

川島は眞顔にたしなめた。けれども、小栗は眞赤に
なつて、少しも怯まずに言ひかへした。

「だつて、この前に大將を俘にしたのだつて僕ぢや
ないか。」

「さうか。ぢや此の次には大尉にしてやる。」

川島はにやりと笑つたと思ふと、忽ち小栗を懐柔

した。保吉は未だに此の少年の悪智慧の鋭さに驚いて居る。

「開戦」と、この時、聲を擧げたのは、表門の前に陣取つた、同じく四五人の敵軍である。敵軍は、今日も辯護士の子の松本を大將にして居るらしい。紺飛白の胸から赤シャツを見せて、髪を分けた松本は、開戦の合圖をする爲か、高高と學校帽を振廻して居る。

「開戦！」

畫札を握つた保吉は、川島の號令のかかると共に、誰よりも先に呐喊した。同時に又靜に群つてゐた鳩

は、夥しい羽音を立てながら、大まはりに中空へ舞上つた。それから未曾有の大激戦である。硝煙は見る見る雲をなし、敵の彈丸は雨のやうに彼等の周圍へ落下して爆發した。併し身方は勇敢にじりじり敵陣へ肉迫した。尤も敵の地雷火は凄じい火柱を上げるが早いか、身方の少將を粉微塵にした。が、敵軍も大佐を失ひ、又その次には保吉の恐れる唯一の工兵を失つて了つた。これを見た身方は、今迄よりも一層猛烈に攻撃を續けた。―といふのは勿論事實ではない。ただ、保吉の空想に映じた回向院の激戦の光景である。

けれども、彼はこの物さびた境内を駈巡りながら、ありありと硝煙の匂を感じ、飛びちがふ砲火の閃きを感じた。いや、或時は、大地の底に爆發の機會を待つ地雷火の心さへ感じたのである。

八 保吉の疑問 下

硝煙は見る見る雲をなし、敵の彈丸は雨のやうに彼等の周圍へ落下して爆發した。保吉はその中を一文字に敵の大將へ飛懸つた。敵の大將は身をかはすと、一散に陣地へ逃込まうとした。保吉はこれへ追ひ

* Savon.(佛)

すがつた。と思ふと、石に躓いたのか、俯向きに其處へ轉んで了つた。同時に勇しい空想も石鹼玉※シヤボンたまのやうに消えて了つた。もう彼は光榮に満ちた一瞬間前の地雷火ではない。顔は一面に鼻血にまみれ、ズボンの膝には大孔があいて、帽子も何もない少年である。彼は辛うじて起ち上ると、思はず大聲に泣き始めた。身方の少年はこの騒に折角の激戦も中止したまま、保吉のまはりに集まつたらしい。

「やあ、負傷してる。」と言ふ者もある。仰向きになり給へ。」と言ふ者もある。誰がしたんだ。」と尋ねる者もある。

が、保吉は痛みよりも寧ろ名狀し難い悲しさの爲に、
二の腕に顔を隠したまま、愈懸命に泣きつづけた。す
ると、突然、耳元で嘲笑の聲を擧げたのは陸軍大將の
川島である。

「やあい、お母さんつて泣いてゐる。」

川島の言葉は忽の中に敵身方の言葉を笑聲に變
じた。けれども、保吉は泣いたにもせよ、お母さんなど
と言つたおぼえはない。それを言つたやうに誣ひる
のは、例の川島の意地悪である。かう思つた彼は、悲し
さにも増した口惜しさに胸が一ぱいになり、更に又、

顫へ泣きに泣きつづけた。併し、全く意氣地のない保
吉には、誰一人として好意を示す者がない。加之、彼等
は口口に川島の言葉を真似しながら、ちりぢりに何
處かへ駈去つた。保吉は、次第に遠ざかる彼等の聲を
憎み憎み、いつか又彼の足許へ下りた無数の鳩にも
目をやらずに、永い間、啜り泣きをやめなかつた。

保吉は、爾來、この「お母さん」を、全然、川島の發明した
嘘とばかり信じてゐた。ところが丁度三年前、上海
へ上陸すると同時に、インフルエンザの爲に或病院
に這入る事になつた。熱は病院へ這入つた後も、容易

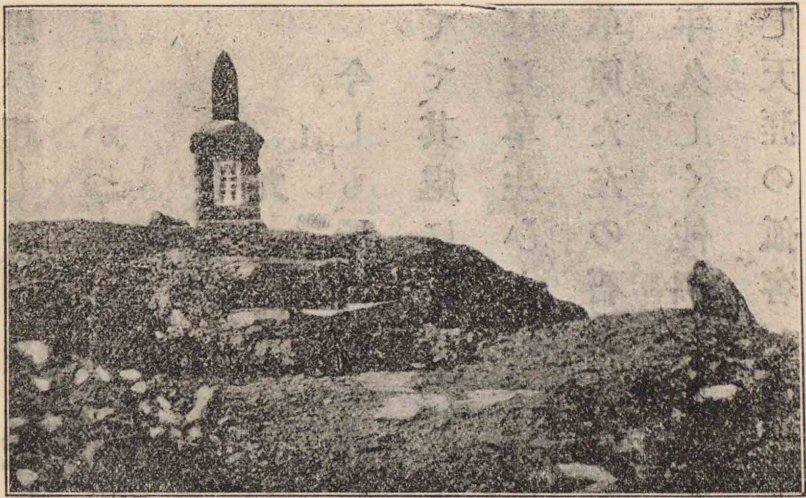
(二) Influenza.
流行性感冒。
支那の揚子江口
にある港。

に彼を離れなかつた。彼は白い寢臺の上に朦朧とした目を開いたまま、蒙古の春を運んで來る黃沙の淒じさを眺めたりした。すると或蒸暑い午後、小説を讀んでゐた看護婦は、突然椅子を離れると、寢臺の側へ歩み寄りながら、不思議さうに彼の顔を覗き込んだ。「おや、お目ざめになつていらつしやいますか。」
「どうして。」
「でも、只今「お母さん」と仰しやつたではありませんか。」

保吉はこの言葉を聞くが早いか、回向院の境内を思ひ起した。川島も或は意地の悪い嘘をついたのではなかつたかも知れぬ。(芥川龍之介―黃雀風)

◎ 九 流血の地

今しも、予は、わが嘗て敵彈に殪れたる處を探し當てて、其處に佇みたれども、岩石の散在せる上に一面に夏草生ひしげり、更に掬むべき風情もなし。ただの草原、ただの石原、然れども予が故郷たるは事實なり。年久しく住馴れし家郷を去りて、遠く山川に放浪せし天涯の孤客が、飄然として再び還るの日、何ぞ圖ら



二〇三 高三地の記念碑

ん、雑草深く鎖して荒廢せ
 る故家の斷礎を見て、天を
 仰いで撫然たる情景を、予
 は戲曲的にも思ひ浮べて、
 ただ黯然として佇みぬ。
 春風秋雨七星霜、その間
 の變遷果して如何。されど、
 その幾變遷ありし荒蕪の
 地も、わが流血を以て染め
 し處ぞと思へば、そぞろ懐

しき情感の湧出づるを如何にかすべき。
 予は己の墳墓となるべかりし岩上に立ちて、暫し
 暗涙に咽びぬ。戦友若し靈あらば、予が姿を望みての
 感や如何。頑石若し心あらば、予が姿を望みての想や
 如何。我は昔の儘の我、石もまた昔の儘の石、只戦友は
 昔の儘にあらずなりぬと思へば、予が胸は苔蒸す戦
 友の屍に對して、慚愧の念に溢れぬ。然れども、別れて
 後七年、ここに再び戦友を訪ひ來れる予の姿を望み
 て、いかでか地下の靈の恨むべき。必ずや喜びて予を
 迎へしならんと、嬉し涙さへも催しぬ。

予の足の踏む處、予の影の落つる處、皆戰友が苦闘
し難戰して忠死したる處、斷石、雜草、皆戰友の血もて
飾られし處なり。百戰の沙場、人再び還らず、徒に風餐
雨打に委する事茲に七年、感慨の切ならざるを得ず。
そのかみの血潮の色も、ソノカミノチマ 偲ばれて心おかるる

撫子の花

乃木將軍、曩に旅順を訪ひ、夏草茂き戰跡に佇みて、
かく詠ぜられしとか。勇士の碧血の残れるかとも見
ゆるは紅き撫子の花なり。野菊、女郎花、萩などの咲亂
れたる中に、破れし靴、裂けし外套、彈丸に射貫かれし

罐詰の殻、人馬の骨片などの散亂せるを見る。嗚呼、い
づれか傷心の種ならざるべき。(櫻井忠温の「銃後に據る」)

一〇 最後の授業上

いつもの通り、僕は學校へ出かけて往つた。今朝は
天氣はほかほか暖かいし、それに、空はからつと晴れ
てゐる。森の邊ではお饒舌の黒鳥が囀り、牧場では木
挽小屋の後の方で普魯西兵が訓練をやつてゐる。
村役場の前を通りかかると、小さな鐵柵のある掲
示場の前に、大勢の人がたかつて居た。二年この方、あ

* Prussia.
Prussia

りとある不吉の報知や、負けた戦報や、徴發の事や、普魯西方の色色の命令や、そんな厭なものが、みんな此處から來たのだ。また何かあるんだなと考へながら、足も止めず、僕はアメル先生の小さな校庭へ這入つて行つた。

開いて居る窓から見ると、僕の仲間は、もうみんな銘銘の腰掛に並んでゐて、アメル先生は恐しい鐵の定木を抱へ込みながら、その前を往つたり來たりして居る。僕はそつと這入つて、僕の机の前に坐つた。

僕は、アメル先生が青色の上等のフロックを着て、

(→) Frock coat.

(→) Silk hat.

綺麗に襟のところでは襷を取つた笹縁のシャツをつけ、祭日か賞品授與式の時でなければ被ることもない、縁取の黒の絹帽シルクハットを被つて來て居るのに氣がついた。そればかりか、教場には何か非常の事でもありさうで、嚴肅な空氣が満ちて居た。

併し一番僕の驚いたのは、教場の奥の方のいつも空虚な机の前に、村の人が僕等と同じく黙つて坐つて居る事だつた。その人達の中には、三角帽を被つたオーゼー爺さんや、前の村長さんなども居た。さうして此等の人達はみんな悲しさうな顔をして居るの

だ。オーゼー爺さんは縁の蝕んだ古いABCの讀本
を持つて來て、それを膝の上に乗せ、開いた頁の上に
大きな眼鏡を置いて居た。

僕が驚いて居る間に、アメル先生は教壇に上つた。
優しい、然も嚴格な聲で僕等に言つた。

「私の子供達。これが御前達に私の教へる最後の授
業だ。伯林(二)から命令が來て、アルサスとローレンとの
小學校では、獨逸語の外、教へてはならぬと言つて來
たのだ。新しい獨逸の先生が明日到着することにな
つて居る。今日は佛蘭西語の教へじまひだから、私は

(一) Berlin.

獨逸の首府。

(二) Alsace.

Lorraine.

ともに佛國
領なりし
か、西紀一
八七〇年普
佛戰爭の結
果、獨逸に
歸す。

お前達に今日こそ本當に一所懸命で聞いて貰はな
ければならぬ。」

この僅ばかりの言葉が、僕をあつと動轉させて了
つた。ああ、何といふみじめな事だ。村役場の揭示はそ
の事だつたのだ。

僕の佛蘭西語の學びじまひ。その僕はまだろくろ
く書く事さへも出來ないのだ。もう僕は習ふ事も出
來ないのだと思ふと、學校を休んで、禽の巢を捜し廻
つたり、池で氷滑をしたりして、無駄に時間を費した
のが今更惜しくなつた。つい今の先まで、重がつて荷

厄介にした教科書、文典の本も、宗教の本も、今となつては、別れのつらい舊い友達のやうな氣がする。先生が取つておきのフロックを着て來たのも、この最後の授業に敬意を表する爲だつた。村の老人達の様子も、今迄この學校へ度々來なかつた事を悔むやうに見えた。この人達の來たのは、四十年も此の小學校に居て、立派に職務を盡してくれた僕等の先生に、感謝の意を表する爲でもあつたし、また、失はれた祖國に對する義務を盡す爲でもあつたらしく思はれた。

一一 最後の授業 下

こんな事を考へて居た時、僕は僕の名を呼ばれたのに氣がついた。僕の誦誦する番が來たのだ。僕はまこと初の言葉にまごついてしまつた。胸が一杯にこみ上げて來て、顔を上げることさへ出來ず、腰掛から立つたまま、身體の權衡を取つて居ると、アメル先生の話聲が聞えた。

「フランツ坊や。私は今日はお前を罰しはせぬ。併しお前は罰せられるのが當然だ。お前などは毎日毎日

こんな事を言つて居たらう、何時でも時間はあるのだ、な。あに明日勉強すればいい。」と。どうだな、今日といふ今日、その結果がお前に分つたらう。全體アルサス人の教育を、何時も其の通りに明日に延ばして居たのが、アルサス州の何よりの不幸だつたのだ。今になると、敵國の奴等は言ふだらう、何だ、貴様達はそれでも佛蘭西人だと言ふのか。ろくに佛蘭西語が書けも讀めもしない癖に。」と。それに何と返事が出来る。」

先生の言葉はそれからそれへと盡きなかつた。先生は、佛蘭西語は我我の先祖からもち傳へた大事な

詞だから、我我はこの詞をよく護つて、決して忘れてはならない。假令、一國民が奴隸の境遇に落ちようと、その國の詞を護つて居る間は、丁度、牢屋の鍵を持つて居るやうなものだと説いた。

更に先生は文典を取つて、僕等に讀んで聞かせた。僕は、自分でよくそれが解つて行くのに驚いた。先生の説明が實によく僕の頭に這入つて行くのだ。僕はこんなによく先生の言ふことを聞いて居たこともなければ、先生もこんなに辛抱して説明したこともなかつた。どうも此の氣の毒な先生は、ここを立去る

について、自分の知つて居るだけの事を、残らず一度に、僕等の頭に詰込んで行かうとするかのやうに思はれた。その課目が終ると、今度は習字の稽古に移つた。先生は特別に僕等に渡してくるために、新しいお手本を用意して來てゐた。そのお手本には、美しい字で「フランス、アルサス。フランス、アルサス。」と書いてあつた。銘銘がどんなに一所懸命で字を習つたか、見せたいやうだつた。一番年の行かぬ生徒達さへ、一心にち

やんと覺悟して、これもまだ佛蘭西語だといふ風に、習字の線を脇目も振らず引いて居た。谷川も、屋根の上では鳩が低い聲で喉を鳴らして居たが、僕はそれを聞きながら考へた。鳩も獨逸語で啼くやうに教へられるのかしら。（菊池幽芳「幽芳集」） 收穫が濟む。霜が降る。裏山の楓が染る。すると兎狩がそろそろ始まる。修繕に遣つてあつた綱も出來て來る。何日は兎狩といふ貼札が出る。脚絆草鞋の用意

に忙しくて、僕等は何も手に着かぬ。愈、その日になつた。炊事番は夜半に起きて握飯を拵へる。支度して、塾の庭に皆が勢揃する頃は、午前三時過でもあらう。月が白く冴えて居る。三度鬨の聲を揚げて、月影を踏んで出かける。大人組は綱をかついで、高らかに詩などを吟じて行く。僕等は黙つて、併し心は得得として尾いて行く。

ねむさうな雞の聲のする村も過ぎ、けたたましく犬の吠えかかる村も過ぎ、野路を通り、谷川を越え、もう一里半も來たらう。月は落ちて、野は一面の曉闇、前

に行く者の姿もはつきりとは見えぬ。ふと、すばらしく大きな、眞黒なものが鼻の先にはあらはれる。山だ、目的の山だ。まだ早い。皆、焚火をしながら、天明を待つて居る。

僕は藁の上に寝ころんで居ると、背は寒い、顔や腹は焚火に暖まる。炎炎と立昇る焰の間に、ちらちら見えて居た一同の赤い顔が次第に遠くなつて、ついつつとりと一寢入したと思へば、忽ち起される。眼を摩つて起上ると、なる程、天明だ。東が白んで、曉の風が切るやうに面を吹く。焚火の跡だけ黒い圓を描いて、

四邊は一面の霜だ。やがて勢揃して山にかかる。進軍の號令がかかる。鬨の聲が一時に揚る。二山も追ふ頃は、もう朝日が晃晃と秋の空に昇つて居る。

今思うても愉快だ。秋が黄に、紅に、紫に、鶯に、あらゆる色彩のかぎりを盡した木を押分け、葉を打拂ひつ、聲をあげて登る心地。網近くまで追ひつめて、どうかと思つて居る時、どこからか「とれた」といふ聲がして、われ知らず棒を振つて勝鬨をあげる心地。網番をして、攻寄せる勢子の叫の間近になるのに、兎のうの字も駈けて來ず、「ああ、だめ」と落膽する時、突然がさが

さと音をさせて、覗く鼻先へ飛込んで、二つ三つ網ながらにとんぼがへる兎を、樹蔭から飛びかかつて抑へる心地。落葉を搔分けて、谷川の水を口づけに飲んで、木の根、草の上に脚投出して、握飯にかぶりつく心地。食つて了つて、落葉の床に仰向けに寝て、碧玉よりも澄んだ空を眺めて、汗ばんだ顔を冷冷した風に吹かせる心地。數へ立てると際限が無い。

秋の日の短さ、まだ三匹しか取れぬのに、もう鳥が啼出した。遙に見える湖や川は、金の如く夕日に閃いて居る。獲物は蔦葛で四脚を縛つて、大人組が昇いで、

とつくに還つた。僕等は紅葉の枝を折つて、ぶらぶら後から還つて行く。山を降りて野に出ると、日は彼方の森に沈んで、夕煙が村村から立昇る。と思ふと、薄紫に煙る野末に、大きな赤い月が顔を出す。その月がやや高く、やや小さくなつて、打連れて歩み行く影の半分短くなる頃には、僕等はまだ塾に歸り着く。草鞋をぬいで、顔を洗つて、先生始め一同大胡坐で、てんでに兔汁を盛つて飯を食ふ。この汁は別名を大根胡蘿蔔・牛蒡・豆腐・蒟蒻といふのではあるまいかと思ふ程、正味には乏しい。併しその味、否それよりも食つて了つ

て、着物も更へず、ぐつすり寝る時の心地は何ともいへない。夢も見ない。身動きもしない。翌朝の九時頃までは死骸も同然だ。(徳富蘆花「思出の記」)

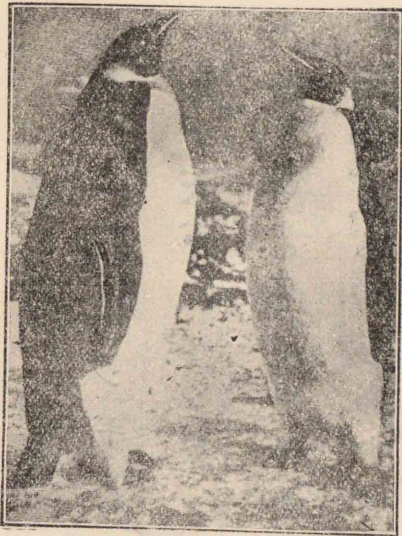
一三 ペンギン

凡そ天下にペンギンほど人を馬鹿にしたものがあるまい。ぎろりとした目玉を光らせて、人間のやうに兩脚で、えつちらおつちらと立つて歩く。背中には黒、腹には白の綿毛が一杯に生えて、兩の翼が短く垂れてゐる。翼と言つても短いから、之で飛ぶ譯には行

*Penguin.

(一) Jacket

この英語の訳



かない。唯、時時、之をふたふたと上下に搏いて、一つには身體の調子を取り、二つには敵と戦ふ時の武器に使ふ。見た所は、さながら小作りな人が、黒の燕尾服タキシードに白のチヨッキチヨッキ、白のズボンズボンで、兩手を振つて歩くやうだ。或種のペンギンは丁度襟の處に黒い線があるので、まるで黒のネクタイネクタイを締めたやうに見える。人間に似た所はこればかりではない。ペンギンとペンギンと出會ふ時は、互にお辭儀をするやうな態で首を下げる。

(二) Necktie

儀をするやうな態で首を下げる。

春先、南極圏へ移つて來て、然るべき處へ各自の巢を作つて了へば、農閑の伊勢詣とでもいふ風に、大勢團體を組んで旅行に出かける。その時は、一人の總指揮官があつて、一同は其の命に従つて連立つて行く。ペンギンの殖民地ともいふべき處には、何十萬といふ大變な數トウサンマンが一緒に集まつて巢をくふが、其の間に何等かの社會的制裁ソシャクテキサイが行はれるものと見えて、餘り甚しい喧嘩はしない。中には、近處に、親を失つた孤兒が心細げに巢に取殘されて啼いてゐるのを見ると、

自分の手に引取つて、養育一切の世話を焼くといふやうな、義侠心に富んだのも居る。

又この鳥は大變な見え坊で、胸の白いところが一寸でも泥にまみれてゐると、仲間の鳥どもが、例の人を馬鹿にしたやうな顔を見合せて、互に嘲り合ふ。こころも頗る人間に似てゐる。善惡ともに人間に似た所が餘り多いので、何だか之を殺すには忍びなかつた。と探検家ノルデンシヨルドも言つてゐる。

* Nordenskjold.
(1832-1901)
のスウェーデンの人。

ペンギンの種類は色々あるが、其の立つて歩くことは同様である。翼が小さくて飛ぶことの出来ぬ者

が、どうして海を隔てた北の方から涉つて来るかといふと、それは泳いで来るのである。泳ぐには魚類の様
様に身體の調子で泳ぐのであつて、兩翼は其の釣合
を取るに止まる。泳ぐに脚を使はぬことは、或人が兩
脚に繩をつけて小舟を曳かせた時、平氣で泳いで行
つたといふのでも知れる。水では泳ぐが、陸では歩く
ところ
で敵に追ひかけられたとか何とかで、大急ぎ
に駈出さうといふ時は、忽ち身を倒して腹這になり、
一瀉千里の勢で、櫓のやうに氷の上を滑る。その早い
ことは、到底人間業では追ひつけぬ位である。

非常早イコト
毛行リコト

(二) Marston. (一) Shackleton.
(1874—)
英國の人。

ペンギンの音楽を好むのは有名な話で、ジャック
ルトンの探検隊が南極に滞在してゐた時、一行中の
滑稽家マーストンが、時々、蓄音機を氷の上に持出し
てやつて見せた。するとペンギンが十羽二十羽とお
ひおひに集まつて来て、遠巻に之を取圍んで、感心し
て聞いてゐたといふ。
何分、氷雪の外に見るもののない處とて、よくよく
無聊に苦しむものと見え、何か變つたことがあると、
随分遠方まで見物に行く。大勢で行く時は、必ず指揮
官が一人あつて、其の指揮に従つて動く。ジャックル

トンの一行が自動車を動かしたり、冬營の小屋を建
てたりしてゐるのが、ペンギン社會の大問題となつ
たと見えて、如何にも珍しさうに、熱心に見に來たと
いふ。
大勢づれのペンギンが、途中、人間か犬かに出會つ
た時は大變である。假に彼方から人間が來たと見る
と、ペンギン一同、遠くではたと立ちどまる。先づ一行
中の雄が一羽出て、恭しく首を下げる。やや伏目にな
つたまま、何やら長長と挨拶の言葉がある。不幸に
して人間には、カ、カ、カ、ガア、ガアと聞えるばかりであ

る。挨拶の臺詞が終つて後、始めて首を上げて、今度は
ずつと仰向いて、嘴で大きな輪を一つ畫いて、さて、ひ
よつと人の顔を見る。お分りになりましたか。といふ
風だ。固より以てお分りになるべき筈のものでない。
人間はぼかんとして立つたままだ。ここに於てペン
ギンは、此奴分らぬわいと見て取つて、今一度、前の挨
拶を長長と繰りかへす。夫でも分らないと見たら、今
度は他のペンギンどもが、がやがや言つて承知しな
い。其處で前に挨拶に出た男は、大きに面目を失つて
引下がる。すると今度は、代り合ひまして代り榮えも

致しませぬ別の雄鳥が出て来て、また、前と同じく、
カ、カ、カ、ガア、ガアをやる。

相手が人間なら、譯の分らぬ長臺詞も、面白半分に
我慢して聞いてやるが、これが犬などでもあつたら、
それこそ騒だ。シャックルトンの探検記の中にある
話だが、或時ペンギンども、右の順序で犬に挨拶をし
たが、固より犬に分らう筈がない。そこでペンギンが
腹を立て、三羽一時に例のカ、カ、カ、ガアをやり出した。
犬は面食つて、ワン、ワンと吠える。他のペンギン等は
きよとんとして呆れて見てゐる。之を見てゐた人人

* Auk.
海すめ。

は孰れも腹を抱へざるはなかつたといふ。大最後に斷つておくが、ペンギンは南半球特有の動物であつて、最も多くゐるのは南極圈内及び其の附近である。北極のオーク※といふのが之に似てゐるとして、一に之を北極ペンギンと稱へることもあるが、それは種類が頗る違つて居る。（杉村楚人冠）

一四 史傳を讀むべし

青年は如何なる書物を讀むべきかとの御問に對し、卑見左に申し述べ候。

人は何人も摸擬性と感染性とを有し居り候。而して一生の中この二性の最も熾なるは少年時代若しくは青年時代に候。どちらかと申せば摸擬性は少年の方が強く、感染性は青年の方が強く候。君子に接すれば君子に感染し、小人に接すれば小人に感染し、偉人に接すれば偉人に感染するものに候へば、讀物の選擇も之より割出さざるべからずと存じ候。

この頃の青年の一般の缺點は、歴史傳記の知識に乏しき事に候。随つて今の青年は、聖人君子

英雄・偉人・志士・仁人・大學者・大宗教家・忠臣・孝子などに接すること極めて少く、随つて自然に人物が小さくなり、眼界が狭くなりて、神經のみが尖り申し候。これ實に國家百年の大患に候。故に小生は大呼す、請ふ、大いに史傳を讀まれよ。」と。

又一つ、今の青年に通じたる缺點これあり候。それは個人的もしくは孤立的といふ點に候。即ち前代と絶縁して、おのれ一代と思ふ考が餘りに強く候。随つて重厚雄大なる氣風なく、こせこせちよこちよこする小人物が多く候。これも史傳

*
易經にある語。

に親しまぬより起る事に候。史傳を讀めば、積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あり。」といふ事がよく解り申すべく、行が自ら重厚になり申すべく、人物もどつしりとして參り申すべく候。

申す迄も無之候へども、國家の盛衰興亡は、全く人物の有無如何に有之候。盛なる國も人物なければ忽ち衰へ、振はざる國も人物あれば忽ち振ひ申し候。我が國の將來の發展に就ても、國民の人格を重厚雄大ならしむるが最大急務なり

と確信致し候。人格を重厚雄大ならしむるには、史傳に親しみて、偉人に感染するに若くは無しと存じ候。聖賢の遺著は史傳を歸納したるものに候へば、史傳と共に常に座右に置き、日夕、絶えず讀誦なさるべく候。さらば、卑怯鄙吝の念は次第に消えて、心が公明正大になり申すべく候。文學も、古きものは精神の香高く、人の心を淨化致し候へども、近時の文學は動もすれば人を誤るもの多ければ、その選擇には深き注意を要すべく候。(天町桂月「新學生訓」)

一五 わが幼時

わが幼き時、上野物語といふ草紙ありけり。これは、寛永寺の花見に、人の群れ來る事どもを記せるなり。わが三歳の春の頃、火燧に足をさして、腹這ひ居て、その草紙を見ながら、筆紙を求めて透寫しけるを、母人の見給ひて、十の中一二はまことの文字もありければ、わが父に見せまゐらせけるを、父の友人の來ては、見けるより、人人も聞傳へて、その寫したる物どもを取傳へて、めではやしたりき。

(一) 東京市上野公園内にあり。東叡山と號す。關東天台宗總本山。

(二) 名を正濟といふ。

日用文を集めた
る書の稱。
上總國久留里の
藩主土屋民部少
輔利直。戸部は
民部省の唐名。
五十卷あり。和
田助則の作とい
ふ。

その後は、常の戯に、筆執りて物書く事のみをしければ、おのづから日々に文字をも見知りたれど、物讀む師友とすべき人なかりければ、只往來物の類などを讀習ふのみなりき。戸部の家人に、富田とて、生國は加賀の國の人と聞えけるが、太平記評判といふ書を傳へて、そのことを講ずるあり。夜々に、わが父など寄合ひつつ、それを聽聞せられけるが、わが四五歳の時、常にその座に侍りけるに、夜いたく更けぬれど、終に座を起つこともなく、講畢りぬれば、その義を請ひ問ふことなどもあるを、人人、奇特のことなり。と言ひあ

へりき。

六歳の夏の頃、上松といふ人の、少しは文字などありけるが、七言絶句の詩三首まで教へて、その意を解聞かせられければ、やがて誦を成して、そを人にも吟じ聞かせたりき。この兒、才あり。いかにも師を擇びて學ばしめらるべし。などかの人も言ひけれど、頑なる昔人等の言ひけるは、昔より利根氣根、黄金の三こん無くては、學匠にはなり難しといふなり。この兒、利根こそ生れつきたらめ、なほ幼くして、その氣根の程も測り難く、家富めりとも見えねば、黄金の事も心得ら

れず。など言合へるに、わが父も、戸部の御慈しみ深く、常に御側を離し給はねば、學に入れ、師に従はしめん事も叶ふべからず。されど、彼の幼きより物書く事をば、人人に語り誇らせ給へるなれば、せめては物書習ふ事のみは、せさせたきものなり。とて、わが八歳の秋、戸部の上總の國に往き給ひける後に、手習ふことを教へられけり。

その冬の十二月に、戸部歸り給ひければ、常に傍に侍ふこと舊の如く、明年の秋、また國に往き給ひける後にて、課を立てられて、日の中には行草の字三千字、

夜に入りて一千字を限りて書出すべし。と命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課いまだ満たざるに、日暮れんとすること度度にて、西向きなる竹縁の上に机を持出でて、書終へぬることもあり。また夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へ難きに、我に附けられたる者と窃に議りて、水二桶づつ、かの竹縁に汲置き、いたく睡の催しぬれば、衣ぬぎ捨てて、まづ一桶の水をかぶりて習ふに、一時はその冷かなるに目覺むる心地すれど、しばし程經ぬれば、身暖かになりて、またも睡くなりぬ。また水をかぶること前の如くし

て、二たび水をかぶりぬる程には、大やうは課をも充て得たりき。これ、わが九歳の秋冬の間のことなり。

○この頃よりは、わが父の人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたりき。十一歳の秋、また課を立てられて、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日の内に淨寫して參らすべし。」と命ぜられ、さて命の如くに事を終へつれば、冊になして戸部に見せ參らするに、褒め給ふこと大方ならざりき。十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふほどの文ども、大方は我に命ぜられき。

*
支憲法印の作ま
いふ。十二月往
復の書簡文なり。

又、十一歳の時に、わが父の友なる關某の子は、太刀打の技に勝れて、人に教ふることのあるを、我にもこの技教へられんことを望むに、「わぬし、いまだ幼し。これらの技學ばんこと早かり。」といふ。さこそは侍るべけれど、太刀使ふこと少しも心得ざらんには、刀脇差腰にせんこと不用のことによ。」と言ひければ、「その言ふところ、實にことわりなり。」とて、一つの技を傳へて、習はしめられけり。

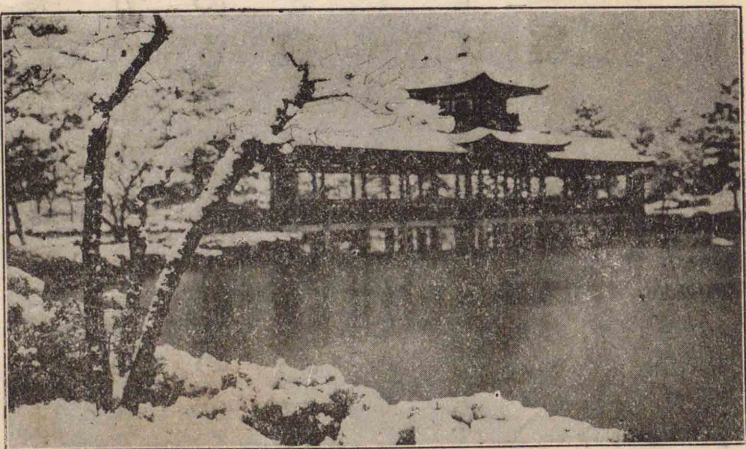
○かかりし程に、その年、十六になれる者の、我と技を試みんといひければ、木刀を取りて、三度合ひて三度

まで勝つことを得たりき。その後は、常にかかる武藝の事どもを好みて、手習ふ事など心にも染めずありけれど、物讀むことは好みければ、わが國の物語・草紙などの類をば殆ど見盡せり。(新井白石一折焚く柴の記)

一六 雪

「夏蟲氷を知らず。」といふ語もある様に、熱帯の住民は玉屑紛紛の美觀を知らない。空が薄墨色に曇つて、底冷がすると思ふ中、いつか、篩でふるつた様な、細かな白い片片が落ちそめる。見るまに天地一白、葉一つ

も無い冬木立も、常磐木の林も、眞白に綿をかけた様になる。富人の金殿・玉樓も、貧家の藁屋根も、差別なく同一の色に埋められる。むさくろしい芥溜も、きたない泥溝板も、皆一樣にその醜を蔽はれる。路上の泥も隠れて、人の足跡、車のわだちが残るかとするれば、又忽に降埋められる。初雪を喜ぶものは犬の子ばかり



雪の風堂

蕪村の門人。

芭蕉の高弟。

りでは無い。雪やこんこと歌ふ子供ばかりでも無い。薪炭に乏しい貧家でも、雪の美景を歎賞せずには居られぬ。花の美は地土の一部分に止まるが、雪の美は天地を一つに包んだ壯觀である。多くの草花の枯果てた時節に、自然はこの壯觀を與へて、我等の心目を一新するのであらう。

雪景色は水邊・山間どことして面白からぬはない。

何を釣る沖の小舟ぞ笠の雪

は水上の風光。

長長と川一筋や雪の原

召波

凡兆

芳賀氏。

松尾氏。

與謝氏。

芭蕉の高弟。

同上。

見渡すかぎり、野山は雪に蔽はれて、川ばかりを埋め残した景色である。

松原に飛脚小さし雪の暮

街道往還のとだえたさびしさを思へば、

箱根越す人もあるらし今朝の雪

宿貸せと刀なげ出す吹雪かな

雪中の山路の困難は一層思ひやられる。

狼の聲揃ふなり雪の暮

荒熊の駈散らしてや笹の雪

深山の荒涼な景色、身にしむ心地がする。

一品

芭蕉

蕪村

丈草

北枝

芭蕉の高弟

同上。

炭氏。

山乞食のこと言うて寝る夜の雪

李由

鶏の音の隣も遠し夜の雪

支考

夜中降通して降積つた幾尺の雪、朝の眺の美しさよ。

いつか朝日が輝き渡つて、

美しき日和になりぬ雪の上

太祇

(國定高等小學讀本に據る)

一七 雪の降る晩

さらさら粉雪の降る晩に

みんなて揃つて手紙かき

母さん出すのはお祖母さん

田舎で達者なお祖母さん

兄さん出すのはお友達

「あさつて歌留多をとりませう」

僕の出すのはお祖父さん

「お祖父さん粉雪が降りまする」

部屋の中はあたたかい
みんなの心もあたたかい

さらさら粉雪の降る晩に

茶の間でみんな手紙かき(西條八十)

一八年賀状

年頭の賀客も絶えて、萬歳の鼓もやみ、追羽子の音も聞えずなりぬ。夕暮は門松の蔭より迫りて、新年第一日の夜の燈は、はなやかに輝きそめぬ。

父の回禮より歸りて後、一家は團欒して楽しく夕餐の食卓に向ひぬ。夕餐終りて後、父は今日の賀客の名刺と今日届きたる年賀状とを調べゐたりしが、やがて予に、「これを讀みて見よ。」とて、一通の封書を渡せり。披きて見れば、そは故郷の知人より來りしものにて、頗る見事なる筆蹟もて、いと丁寧に認めたり。

新年の御慶目出度申納候。先以て御全家御揃御機嫌よく御超歳被遊候段、奉欣賀候。降て私方皆皆無事加年仕候間、乍憚御放念被下度候。舊年中は一方ならぬ御懇情に預り、家内一同感謝の

至に堪へず、尙本年も不相變御厚誼賜はり度候。
 先は右年始の御祝詞申上度如此御座候。頓首。
 さて父はこれに對して、
 年頭の御祝詞難有拜見仕候。御一同様益御多
 祥御越年大賀し奉り候。次に拙宅一同恙なく加
 齡仕候間、御休神被下度候。昨年中は私方よりこ
 そ、舊里の雜事萬端御厄介相掛け候處、御芳情を
 以てそれぞれ都合よく御處理下され、深謝仕候。
 尙、此の上とも萬事宜しく願上候。右御返禮を兼
 ねて御祝辭申上候。謹言。

と、その返書を書送れり。尙この他にも數多の賀狀あ
 りしが、端書の分にて文面の變りしもの數種を父よ
 り示されたる中には、「謹賀新年」「恭賀新正」或は「賀正」の
 類の簡單なる普通のものを始め、

謹賀新年。

併せて、平素の御無音を謝す。

恭しく新年を賀し、高堂の萬福を祝す。

新年の御慶謹んで申納候。尙本年も相變らず

御眷顧を垂れ給はんことを祈り候。

などと記せるものありき。又、

石田 貞

服部嵐雪の句。

元日※や晴れて雀の物がたり
など、古句を記したるものもありたり。

予の叔父より予に宛てたる賀狀には、
樂しき新年を御迎へなされ、御めでたく存候。
今年は旅行中にて、愉快なる團欒に加はりかね、
残念に候。貴君の如き少年の時代には、新年ほど
樂しき時はなかるべしと存候。小生などは繁忙
なる業務に従ひ、東奔西走の中に日を送り、客地
の迎春語るに友もなく候。いづれ本月末には歸
宅致すべく候間、その節は御土産物澤山持參仕

徳川家康の第十子。長じて紀伊和歌山五十萬石を食み、權大納言に至る。

るべく候。貴君も四月よりは中學二年生と御な
りなされ候事と存候。昔、紀伊大納言賴宣は、大阪
の再度の役の時、戦始まれりと聞きて馳せゆき
たれど、事既に終りし後なりしかば、父家康の陣
に赴き、賴宣先陣を承らざりし故に、今日の戦に
會はず、幾重にも口惜しく候。といひて落涙せし
を、松平正綱、傍より、御年も若きことにて候へば、
戦は今より幾度もあるべし。さのみ憾み給ふべ
きに非ず」と申したるに、以ての外に氣色を損じ、
「戦はありもせん。十四歳が再び來べきか。」と詰問

致されし由、物の本に有之候。貴君が中學一年生としての元日は、今日一日に御座候。餘り多くは申さず。この邊の御考ありて、樂しき新年を送られたく候。遊ぶべき時に遊ぶが宜しく候。唯、勤むべき時によく勤められん事を祈り候。御土産物御待ちなさるべく候。匆匆。

とあり。叔父には何とか答ふべき。今年の子は當時の頼宣よりも正に一つの年上なるものを。(藤井紫影)

一九時間

(-) Watarloo. 白耳義の地名。西曆一八一五年六月、英軍と此の地に戦つて大敗す。

(-) Groucy. (1766-1847)

ナポレオンは最も善く時間の大切なるを知れる人なりき。その比類なき大功を奏したるも、多くは時間の使用その妙を極めしがためなり。嘗て、塙地利軍の敗北を嗤つて曰く、かれらは五分時間の價、幾何なるかを知らざるがために敗れたるなり。と。この時間の英雄ナポレオンも、ウォーターローの大戦に於て、自ら時を誤りたると、部將グルーシーの遅参したるによりて、一敗地に塗れ了んぬ。

思ひ立つ日が吉日とは、成功の秘訣を教へたる名言なり。思ひ立つや否や、直にその事に取りかかれれば、

(一) Heraclitus.
(B.C.535?-475?)
ギリシヤの
哲學者。

興味湧くが如く、わが身の勤勞に服しをるを忘れて、
ただ快樂を取りをるを覺ゆるのみ。随つて事業の進
捗も自ら速かなり。若し思ひ立つ日に始めざらんか、
當時の興味は索然として消失し、他日之を始むるに
非常の困難と苦痛とを感ずるのみならず、最後の結
果に至りても、即時に着手したるに劣る事を免れず。
故に或大商店の如きは、規則を設けて、郵書は即日
返答すべし。と定めたりといふ。蓋し事をなすは種子
を蒔くが如く、一度季節を失へば、終に之を蒔くを得
ざることも多し。ヘラクリトス曰く、汝は同じ河水を以

(二) Walter Lowrie.
(1784-1868)
米國の政事
家。

て再び沐浴する事を得ず。と蓋し河水は流れて息ま
ず、時は往いて還らず、大事も、興味も、元氣も、熱心も、一
度去つては復得べからざるをいふなり。
ウォルターローリは僅少の時間を以て多くの事
を成したる人なり。その術を問へば、則ち曰く、何事に
ても、なさねばならぬことは直に之をなすにあり。と。
ああ、これ語淺くして意深きものにあらずや。世の失
敗者を見よ。多くはこれ、明日ありと思ふ心のあだ櫻、
夜半の嵐に吹拂はれて、なほ茫然自失せる者にあら
ざるはなし。鐵は熱せられてなほ紅きうちに打つべ

明日ありと思ふ
心のあだ櫻よは
に嵐の吹かぬも
のかは(親鸞上
人の詠なりとい
ふ)

* Franklin.
(1906—1790)
米國の學者
にして政事
家。

し。枯草は太陽の輝きをる間に乾かすべし。事は時機を失はずして始むべし。古より偉人と呼ばれ、豪傑と稱せられし人は、大抵みな分陰をも惜しみて、機會を捉へし人なり。

時を誤る者は責任を誤る者なり。斷じて世間の信用を受くる事なし。ウォシントンの書記、一日遅刻せり。辯疏するに、己が時計の後れをりしを以てす。ウォシントン直に告げて曰く、汝は正確なる時計を買ふべし。さなくば予は他の書記を備ふべきのみ。と。* フランクリン、常に遅刻がちなる奴僕を、嗤つて曰く、善く

辯解する人は何にも役に立たぬ人なり。と。ネルソン、或時、軍艦に乗らんとす。その前夜、御者來りて、明朝正六時に馬車を廻すべし。といふや、彼は曰く、それより十五分前に來るべし。一定の時より十五分前にあるは予が予たる所以なり。と。ナポレオン、一夕、諸將を晚餐に招く。期に及んで諸將なほ來らざりしかば、彼は一人にて食事を始めたり。食終りて將に食卓を離れんとする頃、諸將の漸く來れるを見て曰く、諸君、既に食事の時間は過ぎたり。請ふ、各自の職務に服せん。と。凡そ時間を大切に守るは、勤勉の習慣を生じ、責任

を盡し、義務を重んずる所以にして、身を立つる基なり。
(立身策に據る)

二〇 善は易く悪は難し



福澤諭吉

人はたとひ自ら善を爲さざるも、人の善ならんことを欲せざるものなし。人を罵りながらも、人に罵らるるを好まず。人を打ちながらも、人に打たるるを悦ばず。その之を好まず悦ば

ざる所が、即ち善を善とし悪を悪とするの本心なれば、苟も善を爲さんと欲する者は、ただ人情自然の赴く所を察して、これに従ふべきのみ。又これに従ふと従はざるとは、人人の心次第なるが如くなれども、その人の私の爲に謀りても、天下の人情に従ひて善を爲すこそ安心の法なれ。これよくよく分別すべき所なり。
凡そ人間の性質は、苦勞よりも安樂を好まざる者なしといふ。されば天下萬民の皆嫌ふ事を犯すと、その好む所に従ふと、孰れか大儀なるべき。人に物を與

ふるは易くして、奪ふは難し。況や人の家に忍び入りて盗むに於てをや、人を傷つけて殺すに於てをや。これ誠に大儀至極にして、この上の骨折苦勞はあるべからず。たとひ物を盗み、人を殺すが如き大罪に至らずとも、少しく人を欺き、少しく人を惱まし、一錢の金を横取し、一枚の紙を私せんとするも、すべて苦勞の種子ならざるはなし。如何となれば、その欺かれ、惱まされ、横取せられ、私せられたる人は、他に犯されたる者にして、その人の君子たり、小人たるに拘らず、決して心にこれを快く思はずして、必ず立腹するのみか、

時としては讐を報いんとすることもあるべし。犯罪者の身にとりては、これ誠に怖しき次第にして、その恐怖、慚愧の一念は、常に本心を惱ます基たるべければなり。されば必ずしも勸善懲惡の教訓を俟たずとも、その天性、苦勞を避けて安樂を好む心を、そのままに發達せしめて、自ら善に従ふの道あるべし。強ひて惡を爲さんとして徒に苦勞する者は、不徳と言はんよりも、寧ろ無智と評すべきなり。(福澤諭吉「福翁百話」)

二一 祖母

子供の時分の事は、もう大抵忘れて了つたが、不思議なもので、覚えて居ることだと、はつきりと昨日の事のやうに思はれるのもある。中にも、こればかりは一生目の底に染付しみいて忘れられまいと思ふのは、十歳の時に死別れた祖母の顔だ。

今でも目を瞑つると、すぐまざまざと目の前に浮ぶ。面長の老人だから無論皺は寄つてゐたが、締つた口元で、段鼻で、なかなか上品な面相だつたが、眼が大きくて、女には強過ぎるほど權があつて、古屋の――これが私の家の姓だ――隠居の眼といつたら、随分評判の

眼だつたさうだ。なるほど、さう言へば、何か氣に入らぬ事があつて、祖母が白眼でじろりと睨むと、子供心にも何だか無氣味だつたやうな記憶がまだ残つて居る。

大抵の人は氣象が眼に出るといふ。祖母がやはりそれだつた。全く眼色のやうな氣象で、勝氣で鋭くて、よく何かに氣の着く、口も八丁、手も八丁といふ、一口に言へば男まさり、まあ、さう言つた質の人だつたさうな。私は子供の事で一向夢中だつたが、

大きくなつて後に、親類の者などの話で聞くと、そ

れが幾分か境遇の然らしめた所もあつたらしい。といふのは、早く祖父に死なれて、若い時から後家で徹して来た。それで人一倍氣を張る。氣を張つて油斷をしなかつたから、一生人に後指をさされるやうな過失がなかつた代りに、餘り人にも好かれずに年をとつて了つて、父の代となつた。

父は祖母とはまるで違つてゐた。怪しい位に好人物で、顔もさつぱり似てゐなかつた。笑ふと目元に小皺の寄る、ふつくらしだ、如何にも愛嬌のある圓顔で、丈は高かつたが、何處か圓味があり、心もその通り角

がなかつた。快活で、わだかまりがなくて、話が好きで、碁が好きで、暇さへあれば誰とでも相手になつて碁をうち、大きな嚏を自慢にする程の無邪氣な人だつた。祖父がやつぱりさりであつたといふから、大方その氣象を受繼いだのであらう。

父はこんな人だし、母は、しよつちゆう、手拭を姉様冠りにして襷がけでよく働く人だつた。その頃の事を誰に聞いても、皆阿母さんはよく辛抱なすつたとはばかりで、その他に何も言はぬから、私の記憶に残るその時分の母は、何時までたつても、やつぱり、手拭を

姉様冠りにして襷がけてよく働く人で、格別どういふ人といふこともない。

かういふ家庭であつたから、自然、祖母が一家の實權を握つてゐた。家内中のこと、一から十まで祖母の方寸に捌かれて、母は勿論、父も別に愚痴をこぼさなかつたやうだ。これほど權威を振つてゐた祖母ではあつたが、どういふものだか、私にかかると全く意氣地がなかつた。

何で祖母が私にかかると意氣地がなくなるのか、それは私には分らなかつた。が、とにかく意氣地もなくするのは事實で、評判の氣むづかし屋が、どうにでも僕の思ふやうになつて了ふ。

まづ何か欲しい物がある。それも無い物ねだり、有る結構な菓子はいやで、無い駄菓子が欲しいなどと言出して、母にねだるが許されない。祖母にねだる。一寸溢る。首玉へかじりついて、より、より。」と二三度、鼻聲で甘える。と、もう祖母は海鼠のやうになつて、お由―母の名だ―あんなに言ふんだから、買つておやりなさい。」といふ。祖母のお聲がかりだから、母も不承不承立つて、雨降りでも僕の口のお使に傘傾けて出か

けようとす。こんなに僕を甘やかすと、流石の父ももう笑つてばかりは居られなくなつて、小言をいふ。僕が泣く。祖母の機嫌が悪い。

「こんな小さい者を、そんなに苛めて育てて、若しか俊坊のやうな事にでもなつたら、どうおしだ。可哀さうぢやないか。」といふのが口切で、ぼつりぼつりと始まる。俊坊といふのは僕の兄で、僕も虚弱だつたが、それ以上に虚弱で、六つの時に亡くなつたさうだ。それも急性胃加答兒でといふから、事によると、祖母が可愛がりごかしに、口を慎ませなかつた祟^たかも知れぬ。

併し、虚弱な兒は大食させつけると丈夫になると言はれて、さうかなと思ふ程の父だから、祖母の矛盾には氣がつかない。ありふれたさう我が儘をさせつけてはくらの所の所で切脱けようとす。祖母もそれはさう思はぬでもないから、内内自分が無理だと思ふだけに、却て激して言葉が荒い。そこで父は黙つて了ふ、母も黙つて出てゆく。ともう十分も経つと、僕が兩手に飴を握つて、こをどりして喜ぶ顔を、祖母が眺めてほくほくすることになつて了ふ。一
かうして、僕の小さいながら際限のない慾が、常に

祖母を通して遂げられる。それは子供心にもうすうす呑込めるから、自然、家内中で僕が一番好きなのは祖母で、「おばあさん」「おばあさん」と跡を慕ふ。何となく祖母を身方のやうに思つて居るから、祖母が家に居る時は、僕は散散わがままを言つて、悪たれて、した、い三昧をし散らすが、留守だと、いぢけるのではないが、餘程おとなしくなる。

その癖、僕は祖母を小馬鹿にしてゐた。何となく奥底が見透されるから、祖母が何と言つたつて、ちつとも怖れない。それを又、勝氣な祖母が何とも思つてゐ

ない。却て、馬鹿にされるのが嬉しいやうに、人が來ると、その話をして、「憎い奴で御座います。」と言ひ言ひ、ほくほくして居る。

兩親も、それは同じことで、散散僕に惱まされながら、やはり何とも思つてゐない。ただ、稀に、「おばあさんにも困る。」と陰で愚痴をこぼすばかり。僕は何方へ廻つても好い兒だつた。(二葉亭四迷)

二二 安宅

時しも頃は春のはじめ、風まだ寒き北國路を、いた

*
文治三年(一一七五)
二月。

*加賀國能美郡にあり。但し當時の關の址は今は海中に陥りたりといふ。

はしや義經は、兄頼朝の疑をうけ、奥州さして落ちて行く。主從僅に十二人、辨慶を先達（か）に、山伏姿に身をやつし、日數程へて加賀の國、安宅（あ）の港に着きにけり。義（あ）いかに辨慶、旅人等の噂によれば、安宅には特に關（あ）を設けて、山伏をきびしく取調ぶる由、如何にすべ（あ）きぞ。辨（あ）これはゆゆしき御大事なり。きつと、これにて御工夫あるべし。人々「いやいや、何程の事かあらん。ただ打破つて御通（あ）りあるべし。」

辨（あ）いやいや、打破らんは易けれども、大事の前の小事なれば、成るべく穩かなる手段を取りたし。義（あ）然らば辨慶、ともかくも其の方の工夫に任せん。宜しく計らひくれよ。辨（あ）畏つて候。先づ考へ出したることは、我等かく山伏（あ）に身をやつせども、包みがたきは我が君の御品格なり。おそれながら暫く強力に御身をやつされ、御（あ）笠深く召され、我等の笈を負ひて、わざと後にさがつて御通りあれかし。さなくば忽に見出され候はん。

義げにげに、これは尤もの事なり。」

姿をやつし主従は、やうやく關に近づきて、通らん

とすれば、關の役人富樫左衛門、

富やあやあ、山伏。關なるぞ。名をなのれ。」

とぞ呼ばはりける。

辨承つて候。これは南都東大寺建立の爲に、北陸道を

勸進する山伏にて候。」

富それは殊勝の事なれども、山伏なるからは此の關

は通しがたし。」

辨して、そのいはれは。」

富さればなり。賴朝・義經御不和により、義經殿には山
伏と姿をかへて、奥州へ落ちらるる由。故に諸國に
新關を設けて、山伏をかたく止むるなり。一人も通
しがたし。」

辨承つて候。しかし贗山伏をこそ止めらるるならぬ。

まことの山伏を止めたまふ必要は候はじ。」

富あらむづかし。論より證據なり。まこと東大寺建立

の勸進ならば、勸進帳のあるべき筈ぞ。ここにてそ

れを讀上げられよ。某これにて聽聞せん。」

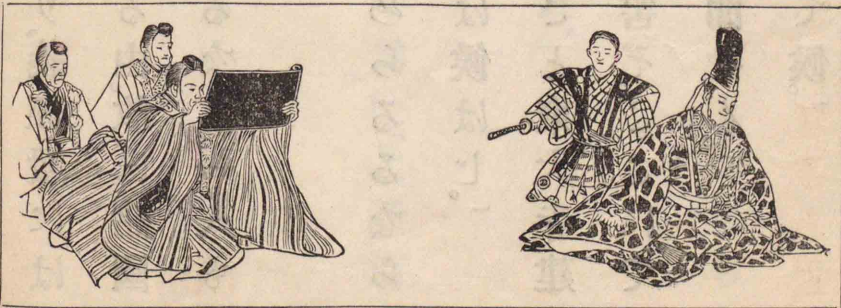
辨何と、勸進帳を讀めとや。心得申して候。」

もとより勸進帳のあらばこそ。笈の中よりあり合せの巻物一つ取出し、勸進帳と名づけつつ、即智を以て文を綴り、まことしやかに聲高高と、天も響けと讀上げけり。富樫つくづく聞きすまし、

富、最早疑は晴れて候。御通り候へ。」

辨、かたじけなく候。

げにや、紅は園生に植ゑても紛なし。後に従ふ強力を、富樫目早く見と



帳 進 勸

がめて、

富、いや、暫く。その強力は通し難し。とどまれ。」

とののしりぬ。すは我が君をあやしむは、一期の浮沈と仰天し、皆一同に立ちとどまる。

辨、慶騒がず、そらとぼけ、

辨、やい、強力め。何とて早く通らぬぞ。」

富、いや、それはこなたより止めたるなり。」

辨、そは又何故。」

富、あの強力が姿、義経殿に似たるゆゑなり。」

辨、奇怪千萬、義経殿に似たりとや。しかいはるる強力

めは一生の名譽ならんが、さりとは腹立たしや。けふのうちには能登境まで行かんと思へばこそ、強力やとひたるに、僅の笈を重げに負ひて、人人に後るればこそ、貴人かとも怪しまるれ。憎さも憎し、いで、懲してくれん。」

金剛杖をおつ取つて、さんざんに打擲す。これはと驚く人人を、辨慶目にて制しとめ、尙も激しく打据る。富樫やうやく疑念を解き、

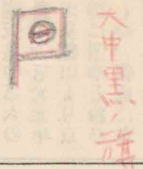
富「これは我等が誤なり。その強力には構なし。疾く疾く一同御通りあれ。」

いふに人人ほつと息、毒蛇の口を逃れし思、さらばさらばと立ちあがり、關路をあとしづしづと、奥州さして下りけり。(坪内逍遙)

二三 金ヶ崎

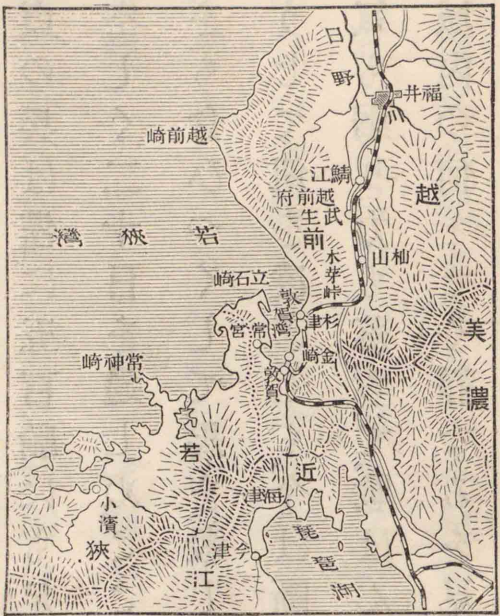
越前の賊足利尾張守高經が手に瓜生判官保、その弟兵庫助重^{かさね}彈正左衛門照義鑑房三人あり。柚山の城にありける時、官軍に屬する心見えければ、脇屋義助その子式部大輔義治をあづけて、自らは敦賀に歸り、十六騎にて東宮^{とうきう}を奉じて、義貞等の籠りたる金ヶ崎

足利尊氏の族なり。尾張三功と稱す。
越前の人。延元二年(九七七)金ヶ崎を援けんとし、高師泰に破られ、弟義鑑と共に戦死す。
新田義貞の弟。恒良親王、後醍醐天皇の第六の皇子。延元元年天皇叡山より京都に還幸し給ひし時、義貞に奉ぜられて北國に行啓ありき。
新田義貞。



城に入りぬ。高經は月を越えてこの城を攻めければ、瓜生等にも此處に向へと令せしに、俄に心變りして、義治を大將におしたて、飽和あわの社の前に大中黒の旗を擧げてけり。かねて賊軍に不平なりし者ども此處彼處より馳集まりて、千餘騎になりぬ。高經大いに驚きて、先づ之を討たばやといふ。瓜生等敵兵を押靡おしなけて越前の府に出づ。初の程は向ふところ勝たざるはなかりしが、敦賀に向ひ、金ヶ崎の後攻せんとて出立ちし時、運や盡きたりけん、大勢にかかり合ひて、激戦しけるが、保も義鑑房も討死して、大いに敗れぬ。

これより先、金ヶ崎には兵糧盡きて、ただ瓜生が後攻をのみ命とせしが、はかなく敗れぬと聞きて、悲し



きことかぎりなし。心こそ彌猛にはやれ、今は殆ど狙上の魚の如し。かくてあらば徒に餓死にするより外なければ、義貞、義助、洞院實世等、河島惟頼を道しるべとして、夜間にまぎれて、柚山へと落ちゆきぬ。これ急に兵を催して、死に迫れる城兵を救は

太政大臣公賢の子、越前に戦ひし後、吉野に歸り、後村上天皇の時、従一位左大臣となる。
越前の人。左近藏人と稱す。

んが爲なり。

かかる程に寄手は愈加はりて、十萬騎にあまり、義貞の兵は僅に五百騎にも足らず、心のみいらだちて空しく二十日を過しぬ。ここに城中は木の根、草の根をも食ひつくして、馬を殺し、鎧の皮を煮などして、辛うじて飢を凌ぎしも、今は斷食十日にも餘りければ、氣も弱り、力も落ちて、戦はん心もなし。寄手の兵ども、城内の何となく靜なるを見て、これ糧に盡きて弱りたるならん。常には馬を洗ひ、水を蹴させなどしけるも、この頃はその足音だにせざるは、そも食ひつくし

たるなるべし。一攻め攻めて見ばや。とて、大手搦手の兵ども、えいや、えいや、えいやと這上る。

城兵必死となりて、木戸の邊まではよろめき出たれども、弓引かん力もなく、ただ塀のかげ、岸のもとに息づき居るのみ。あはれ、その心は賊の全軍をも吞むべきものあらんも、任せぬは力なり。賊は之を見て愈烈しく寄せく。城兵は劍を杖づきて立ちたるまま討たるるもあり、おのが創口の血を吸ひて渴を凌ぎ、死人の肉を食ひて一時の飢を救ひし者もあれども、大方弱り果てたる末なれば、見る見る敵兵にさし殺

越前の人。名は氏治。氣比社の大宮司たり。この役に尊良親王に殉死す。
晴。氏治の長子、齋

新田義貞の長子。後醍醐天皇第一の皇子。東宮の御兄。

さるる者數を知らず。今は敵已に二の木戸まで攻寄せたり、速かに東宮を遁しまつれ。といふ聲聲に、氣比大宮司の太郎、竊に誘ひ奉り、小舟に乗せて遁しまつる。

義顯、一の宮尊良親王の御前に跪き、あはれ御運は盡き侍りぬ。我等は弓矢の名を惜しむ家に侍れば、今自害仕るべし。君はここに静におはしませよ。賊暴戻なりといへども、手むかひまつる事はせじ。只天運の盡きさせ給へるこそ後の世までの恨には侍れ。御姿を見奉るもこれ限にて侍り。といふ。宮はいつもより

も御心地よげなる御けしきにて、主上帝都へ還幸まします時、我、元首となり、汝を股肱とせよとこそ仰せ給ひつれ。股肱なくしていかで元首のみあらんや。我も命を白刃の上に縮めて、怨を黄泉の下に酬いぬべし。そもそも自害とはいかやうにするものなるぞ。と宣ふに、義顯落つる涙を鎧の袖にうけて、かやうにこそ候ものなれ。と、やがて肌おしぬぎ、短刀逆手に取直して、左の脇につき立て、右の脇のあばら骨二三枚かけて、めりめりとかき破り、その刀を御前にさしおきて、うつつぶしぬ。宮、我も後れじとて、その刀を取りて刺

さんとし給ふに、柄口の血あまり迂りければ、御衣の袖にてその柄をきりきりと押しまきて、雪のやうなる御肌に、御胸の邊よりかけていたく突立て、義顯の死骸を枕に、そのまま絶えいり給ひにき。これを見る人人、我も我もと押重なりて切腹す。その數三百餘人とぞ聞えし。

氣比の太郎は東宮をば小舟に乗せまつり、海上三十餘町を遊ぎて、蕪木※の浦につきぬ。さてあやしげなる浦人の家に東宮を預けおきまゐらせて、こは日本の國の主にならせ給ふべき人に渡らせ給ふぞ。いか

※越前南條郡河野村にあり。敦賀港の直北十一里。

にもして、柚山城に入れまゐらせよ。」と申しふくめて、おのれは再び金ヶ崎城にかへり入りて自害しけり。時に延元二年三月の末つかた。城陥りて、北國の賊勢いよいよ募りぬ。(落合直文「新撰日本外史」)

二四 伊勢武者と鶯

今は昔、京都七條の南、室町に、大中臣輔親といへる人住ひけり。その邸宅は方一町ばかりもありて、池の中島を遙にさし出し、小松を長く植ゑて、丹後の天の橋立のさまを摸したり。寢殿の南の庇をば、月の光を

入れんとて、わざとささざりけり。
春の初、軒近き梅が枝に、鶯の日ごとに巳の時ばかりに來て啼きけるを、いと面白く思ひて、歌よみどもに、かかる事あり。明日の辰の時ばかりに來て聞き給へ。といひ遣りけり。伊勢武者の折ふし宿直してありけるに、しかじかの事あり。人人來らん時、鶯の逃ぐる事もあらんは興さむるわざなれば、その心して逃すな。と言ひふくめけり。この侍、いかでか逃し申すべき。とうけひきたり。さてその日になりて、輔親は疾く起出でて、寢殿の南面を掃ひ清めて待ちゐたり。

辰の刻ばかりに、歌よみども集ひ來ぬ。今や鶯來啼く。と語り合ひつつ、待てども待てども啼かず。はや巳の時も過ぎ、午の下刻になりても聲もせねば、如何にしつる事ぞと、輔親は顔にいらだちて、かの伊勢武者を呼びて、今朝は鶯は來ざりつるか。と問ふ。侍答へて、鶯めはささざきより疾く參りて候を、逃げん様の見え候へば、召留めて置き申し候。といふ。召留むとは如何にしけるぞ。と問へば、取りてまゐらん。とて立ちぬ。心得ぬことを言ふものかなと思ふほどに、木の枝に鶯を結びつけて持ち來れり。淺ましなど言はんも愚

なり。何とてかくはしたるぞ。と問へば、昨日の仰に、鶯
來らば逃すな。とありしかば、いふかひなく逃したら
んには、弓矢取る身の面目にもかかはる事と思ひて、
蕪矢もて射落したるにて候。と申す。輔親も集まれる
人人も、皆いとあさましと打驚きて、この侍の顔を見
れば、脇かいどりて得意氣なり。人人はをかしけれど
も、この男の氣色に恐れてえも笑はず。一人立ち、二人
立ちて、皆かへりけり。〔十訓抄に據る〕

二五 茶話

一、つくり鬚

赤穂の儒者赤松滄州は、學者には惜しいほど堂堂
たる顔の持主であつた。就中その鬚は、すばらしく立
派なので、自分でも大分それが自慢らしく、どうぢや、
日本一の鬚ぢやぞ。と、他人の顔さへ見ると、長い鬚を
扱いて見せた。

或日の暮がた、いつものやうに、滄州が縁先で鬚を
扱いて好い氣持になつて居ると、そこへ恰幅ちやくぶの好い
お爺さんが訪ねて來た。ついぞ見知らぬ顔だが、その
鬚を見ると、流石の滄州も吃驚した。長さは三尺にも

餘らう。銀のやうな白さで、扱くと大した音がしさうにさへ思はれた。

滄州はさつと顔色を變へた。お爺さんはそれを尻目にかけて座敷へ通つたが、初對面の挨拶が濟むか濟まないかに、もう聲を張上げて、色色、世間話を始めた。時時は熊の膽のやうな苦い皮肉を混へながら。

滄州はそれが癢にさはつてならなかつた。何とかして高飛車に出てやらうと、幾度か下腹に力を入れて見たが、その都度、お爺さんが得意さうに扱いて居る銀のやうな鬚が眼につくので、たわいもない事を

言つて了つて、我ながら、はつとした。

やがてお爺さんは好い加減に氣焰を揚げて座を起つた。滄州は溜息をつきつき、何しろ立派な鬚だ。と腹の中で感歎しながら、勢のない顔をして玄關まで見送りに往つた。沓脱に立つたお爺さんは、一寸頤に手をやつたと思ふと、いきなり鬚を脱して片手に持つた。さうして、素知らぬ顔をして歸つて行つた。

「ぢや、作り鬚だつたのか。」

滄州は覺えず斯う口走つた。さて、今まで忘れてゐた自分の鬚を握つて、拂子のやうに振つてみたが、も

り間に合はなかつた。

二、魚の骨

京都の知恩院といへば、言ふまでもなく浄土宗の大本山である。その三十九代目の住職に、萬靈上人といふ、大津生れの坊さんがゐた。三十八年の間、引續いて住職を勤め、延寶八年※とかに九十二でなくなつたといふから、随分達者な坊さんであつたには相違ない。

※
二三四〇年。

この坊さんが、なくなる五六年前の事であつた。或日、寺男を指圖して庫裏の床下を掃除させた。すると、

床下からは、つい此の間食べあらしたばかりの魚の骨がどつさり出た。

「てつきり納所坊主の仕業に相違ない。お上人様のお目に懸けなくては。」といふので、寺男はその魚の骨を拾ひ集めて、上人の居間へ這入つて行つた。上人はそれを見て、變に顔を歪めてゐたが、暫くすると、「どうも今時の若い奴は根氣が弱くていかんな。」と獨語のやうに言つた。

「眞實で御座いますよ。お坊さんの癖に、こんな物まで啄つくなんて。お上人様方のお若い時分には、本當に

まづい物ばかり召上つてたぢや御座いませんか。」と、寺男がぶつぶつ眩くと、上人は掌で靜に抑へ付けるやうな眞似をした。

「いやいや、そんな積りて言つたのぢやない。わし等が若い時分には、骨なぞ食べのこすやうな事はしなかつたと言つた迄ぢや。」

三、怖い物

どんな人にも好き嫌ひはある。昔、有馬兵庫頭といふ人があつた。その人は一代の中に、色色な仕事もしたらしいが、その仕事よりも、蟹を恐れたといふ事

で今だに名が残つて居る。野路で、偶、赤い爪を振りあげた蟹に出會すると、兵庫頭はぶるぶる顫へて、いきなり馬を引返して逃出したものださうだ。若しも心得の悪い蟹が、金を貸せとでも言ひださうものなら、兵庫頭は馬の鞍から、知行も何も振捨てて、駈出したかも知れない。

大久保伊勢守といふのは、ひどく蜘蛛を怖れた。邸の植込を逍遙して居る時、白い梔子の花蔭に蜘蛛が居睡をして居るのを見つけてもすると、眞蒼になつて拔脚して逃出したさうだ。

蛙は愛嬌者で、臍のない癖に、人間並に一つは持合せて居るらしい顔付をして居るが、廣い世間には、こんな愛嬌者を何よりも恐れる人さへある。それは栗原主殿頭といはれた男で、この男は雷よりも地震よりも此の蛙の方が恐しかった。或時、伴の奴を一人つれて野路を辿つて居ると、唐突に蝦蟇に出會した。蝦蟇は先刻まで物蔭で何か深遠な學理を考へてゐたのだが、滅法腹が空いたので、のつそり明るみへ這出して來たところだった。

主殿頭はそれを見ると、一度に二間ほど後に飛び

しぎつた。そして刀に手をかけて吃きつとなつた。刀は備前の正眞物であつたが、刀鍛冶は蝦蟇を斬るために態拵へたわけでもなかつた。

「につくき蝦蟇めが、己はまだ主殿頭を知らぬと見えるな。」と思ひきり大きな聲で怒鳴りつけた。實際に蝦蟇はまだ主殿頭を知らなかつた。で、目をあけて、念入りに相手の顔を見上げたが、別に秀れて高い鼻を持つて居るでもなかつた。

「おのれ、早くすぎり居らぬか。」と主殿頭は顫ひ顫ひ刀を引抜いて見せた。けれども、蝦蟇の方では、特に退

く程の必要を感じなかつたので、寧ろ二足三足のそのと前へ這出して來た。主殿頭はそれを見ると、いや、膽の太い奴めが。其方には怖いといふ事が判らぬと見えるな。と言ふかと思ふと、もうそのまま刀を擔いで、一散に逃出してゐたさうだ。(薄田泣菫一茶話)

二六 板塀

*
白菜の一種。

或日、裏の畠に出て、山東菜さんとうさいの蟲を取つてゐた。ふと氣がつくと、板塀の向う側に二三人の子供が來て、何かひそひそと話し合つてゐる。そのうちに、一人の子

供が板塀を登り始めた。思ふに、塀のすぐ内側にある栗の實を落さうとするものらしい。

私はそうつと塀に近づいて行つて、こつこつと板を叩いた。子供は登りかけたまま、だれだい、だれだい。と大きな聲で尋ねた。私は黙つてゐた。

やがて子供は再び登りだして、塀の上に手をかけた。私が箒の先で靜に其の子供の手を引搔いてやると、子供は「だれだい、いたづらする奴は。」と言ひながら、更に登つて來たが、塀の上から顔を突きだして私を見つけると、くるりと後の下の方を振向いて、新ちや

ん、駄目だよ。大人がゐるんだもの。」と不平らしく言つて、悠悠と降りて行つた。

事件は只これだけである。さうして、このやうな事は廣い世間には有りがちの事で、特に驚いたり注意したりするには足らぬ事かも知れない。實際、私も最初は、泥坊が主人を誰何するばかりでなく、主人が其處に居るのを咎めるかのやうな口吻を耳にして、只噴出したいやうな氣持に誘はれたのである。しかし考へて見れば、假令一時の出來心で、深い反省のない行爲であるにもせよ、油斷さへあれば他人の物でも

掠めようとする人の子の罪惡の芽は、まだ無邪氣に嬉戲してゐるべきこんな子供達にさへ、既に十分に萌してゐるのではあるまいか。さうして此のやうな罪惡の芽は、只一笑に付して看過し、何等の反省も匡正も試みずに、生長するが儘に放任して可いであらうか。私はまだ箒を持つたまま暫く考へてゐた。

板塀の向う側では、次第に遠ざかる小供達の足音や話聲が聞えてゐた。(五十嵐力の「甲鳥園隨筆」に據る)

二七 春のおとづれ

流石

ア、レ、バ、ト、ハ、
老、實、を、藤、に、
在、ハ、ハ、チ、イ

二三日前から、近くの藪に来て鶯が啼くやうになつた。二階の窓をあけると、隣屋敷の梅などが見える。天氣の好い日には遠く微かに筑波の姿も見える。窓のすぐ下には木瓜や棗がまだ冬枯れた枝を見せて居るが、雨に濡れた梢には既に青い小さな芽生が出て來た。流石に春が來たといふ感じが自然に湧く。

私はまた其の窓から柳の芽生をも見出す。さうすると私の心臓は、何か大きな發見でもしたやうに、鼓動を昂める。本當に春が來たのだ。といふ喜悅が、私の血管の端端までも波うつて行くのである。恐らく此

の喜悅は、私達の血管を流れてゐる原始人の魂が、春を意識した刹那のものであらう。

家を持たず、食物を貯へることをしない原始人にとつて、冬くらゐ恐しいものはなかつたであらう。随つて、春のおとづれほど喜ばしいものもなかつたであらう。豊かな海の幸、豊かな山の幸が彼等を待つてゐる春のおとづれは、彼等にとつては甦であつた。

私は愈近づいて來る春を待つてゐる。私の血管を流れてゐる原始人の血は蠢き始めてゐる。

(吉田絃二郎の「小鳥の來る日」に據る)

二八 うれしき

憂しとも思ひ辛しとも思ひながら、その事をなし果てたる後、浴みしたる時の嬉しさ。

久しく讀まざりし書を引出して、心ゆるやかに繙き見る折から、なシさシけシ深かりし人の文のはさまりたるに眼とまりて、十年程の昔を今に繰返し見たる嬉しさ。

蟲のためにいたく衰へたる樹を、枝など截りつめて、活かさんものと念じたるに、多く芽をふき出して

勢よくなりたるを見たる嬉しさ。

長き病のやうやく癒えたる時、縁端近くゐざり出でて、久しく見ざりし庭の面を見、天の色を見たる嬉しさ。

親しき友の子孫などの、美しう賢う生ひたち行くを見る嬉しさ。

見ミつツけケきキ人の思のほかに親にはいとやさしう仕ふるよし聞きたる嬉しさ。

わが言を用ひたる人の、そのため幸福多くなりたりと聞きたるうれしさ。

みづから種子を下したる草の、初花咲きたる嬉しさ。

自ら克たんとはおもひながら、慾の抑へがたさに、克つあたはで、歳月経たることを、一日遂に思ひきり得て、危き戦に勝ちたる心地したる嬉しさ。

自ら箒を執りて清らかに庭掃きたる後、直に落葉の一ひら、二ひら、落霜紅の一顆二顆落散りたるを見ては、流石になやましく思ふを免れざりしが、心をかへて觀れば、地に箒目のあるがため、葉の散れるも實の散れるも趣をなして、寧ろをかしたも思ひなされ

たる嬉しさ。

借りたる物を悉く返したる、なさて叶はぬことをなし果てたる、訪はで叶はぬ人を訪ひたる、読みさしたる書を讀みつくしたる、みな嬉し。

年も暮れたる大晦日の夜に、よろづの事をしはてて、明日のまうけも整ひつなど思ひつつ、取片づけたる居間の、常には様異なりたるが中に、身を清めて正しく坐りたる嬉しさ。

春を迎へて、父母・兄弟姉妹皆打揃ひたる嬉しさ。

(幸田露伴―長語)

二九 思ひ出の國上

濃い霧が一面にかかつてゐます。その中から大きな櫛の幹がずつと前方右手寄りに立つてゐるのが見えます。樹の上には札が打着けてあります。乳色の曇つた光が何處とはなしにぼうつと漂うてゐます。チルチルとミチルとの兄妹は櫛の樹の下に立つてゐます。

チルチル「ここに樹があらあ。」

ミチル「札もあるわ。」

チルチル「讀めないなあ。お待ち、この根の上に乗つて見るから。」

わかつた『思ひ出の國』と書いてある。」

ミチル「此處から這入るの。」

チルチル「うん、矢が出てゐるもの。」

(三)The land of Memory.

(一)Tytyl.

(二)Mytyl.

ミチル「あら、さう。祖父さんと、祖母さんと、何處にゐて。」

チルチル「霧にかくれてゐるんだよ。今に分るよ。」

ミチル「まだ何も見えないわ。自分の足も手も見えないわ。(べ

そをかきながら、)あたし冷たいわ。もう行くのがいやにな

つたわ。お家へ歸りませうよ。」

チルチル「止せ、いつも泣く奴があるもんか。恥しいと思はない

かい。大きな赤ちゃんだなあ。御覽、霧がだんだん霽れて

來たから。これで向うが見えるだらう。」

本當に霧が段段に動き出しました。少しづつ薄れて明るくなりました。やがて漸くはつきりしてくる光の中から、緑の葉で葺いた丸屋根の下に、蔓の一ぱいからんだ、楽しさうな百姓の小家が見えて來ました。窓も扉もあけ放したままです。庇の下には蜜蜂の巢があ

り、窓の敷居の上には花の鉢が置いてあり、鶇つぐろを入れた鳥籠がつるしてあります。戸口の傍に長い腰掛が置いてあつて、その上に年をとつた百姓の夫妻が腰をかけたまま、よく寢入つてゐます。これがチルチル達のお祖父さんとお祖母さんとであります。

チルチル (ふとお祖父さん達を見つけて) 「ああ、おぢいさんだ。ああ、

おばあさんだ。」

ミチル (手を叩きながら) 「ええ、ええ。さうだわ、さうだわ。」

チルチル (少しまだ腑に落ちない顔をして) 「お待ち。おぢいさんたち、

一體動けるのか知ら。樹の蔭にかくれて見てやらう。」

いふうちに、おばあさんは眼をぱちんと開きました。首を上げて、のびをして、溜息を一つすると、おぢいさんの方を見ました。おぢいさんもそろそろ眼が覺めたやうでした。

おばあさん 「今日あたり、まだ生きて居る孫たちが逢ひに来て

くれるやうな氣がしますね。」

おぢいさん 「きつと孫たちは、私達の事を思ひ出してくれたのだ。何だかそんな氣がするし、足がしくしく痛むから。」

おばあさん 「きつともうすぐ側に來て居るに違ありません。眼の中で嬉しい涙が踊を踊つてゐますよ。」

おぢいさん 「うんにや、どうして、まだなかなか遠いやうだ。わたしはまだなかなか元氣がつかない。」

おばあさん 「いいえ、確に來てゐます。私はもうこの通り、しつかりしましたよ。」

チルチルとミチル (この時、樹の蔭から駆出して來て) 「僕達ここに居ますよ。あたしたち此處にゐてよ。おぢいさん。おばあさん。」

僕達ですよ。あたしたちよ。」

おぢいさん 「ほら御覽、わしが言つたとほりだ。今日は孫たちが
吃度くると言つたから。」

おばあさん 「まあチルチル。まあミチル。お前だね。あの子ですよ。
あの子たちですよ。」（迎へに駈けて行かうとしましたが、）「駈け
られない。また^{*}リウマチが起つた。」

おぢいさん （同じやうにびつこをひきながら、）「わしも駄目だ。何しろ
櫛の大木から落ちて足を挫いてから、何時も木の義足
をはめて居るのだから。」

おぢいさん おばあさんと子供達とは狂氣の様に抱き合ひました。

おばあさん 「チルチル、お前はまあ随分大きく丈夫さうにおな

りだね。」

おぢいさん 「それからミチルも御覽、この子を。いい髪の毛ぢや
ないか。可愛い目ぢやないか。」

おばあさん 「さあ、もう一度だつこ。さあ膝の上にお乗り。」

おぢいさん 「これこれ、わしにはどうしたのだえ。」

おばあさん 「いいえ、いいえ。まあ、先に私の方へお出で。おとうさ
んやおかあさんはどうおしだえ。」

チルチル 「達者だよ、おばあさん。僕たち出て来た時には、よろしく
眠つてゐたよ。」

おばあさん （子供達を眺めたり、頬をすりつけたりして、）「まあ、よくねえ、
小ざつぱりと綺麗にしてゐるね。おかあさんがお洗濯

してくれるのかえ。靴下にも孔一つあいてゐないしねえ。前には私がよく繕つて上げたものだよ。覚えてお出でかえ。どうしてもつと度度来てくれないのさ。来てくれると、本當に嬉しいんだよ。もう幾月も幾月も皆わたし達を忘れて了つてゐたんだよ。だから誰にも逢へないぢやないか。」

「来たくつても来られないのだもの、おばあさん。今日は妖女のおばあさんが寄越してくれたんです。」

「いいえ、私達は何時でも此處にちやんとして、何時でも生きてゐる人達のちよいちよい逢ひに来てくれるのを待つてゐるのだよ。だが、ほんのたまにしか来な

* All-hallows.
天上諸聖徒の
靈を祭る日。

いんだもの。この前お前達の来た時はと、さうさね、あれは何時だつたけね。さうさう、十一月一日の萬聖節だつた、お寺の鐘が鳴つてゐたから。」

「萬聖節ですつて。嘘だあ、僕達あの日は大へん風を引いて、何處へも出やしなかつたもの。」

「さうかい。でもお前達、その日、私達の事を思ひ出したらう。」

「ああ。」

「ねえ、そら、お前達が思ひ出してくれれば、何時でも私達は目が覺めて、お前達に逢へるのだよ。」

「何だ、それだけでいいのか。」

おばあさん 「でも、まあ、お前、その位の事は知つてお出でだらう。」
チルチル 「うん、知らないよ。」

おばあさん (おぢいさんに) 「まあ驚きましたね。あちらでは皆まだ知らないんですとさ。ぢや皆なんにも分らないのか知ら。」

おぢいさん 「私達のゐた時と變りはないさ。生きてゐる人間によその世界のことを話させると、随分馬鹿なものだからなあ。」

チルチル 「おぢいさん達は何時でも眠つてゐるの。」

おぢいさん 「うん、うん、よく眠るよ。眠つてゐる中に生きてゐる人間が私達の事を思ひ出してくれると、すぐ目が覺め

る。いやもう、人間の世の中をおしまひにしてしまつてから、ゆつくりと眠るのは好いものだよ。だが時時目を覺すのも楽しみだよ。」

チルチル 「ぢや、おぢいさんたち本當は死んだんぢやないの。」

おぢいさん 「お前何を言ふのだえ。この子は何を言つてゐるのだなあ。どうも私達にもう分らなくなつてゐる言葉を使ふのだな。それは新しい言葉かな。」

チルチル 「死ぬつて言葉が。」

おぢいさん 「さうだよ。その言葉だよ。それは何の事だな。」

チルチル 「だつて、人間がもう生きてゐなくなる事なんてせう。」

おぢいさん 「馬鹿だなあ、あちらの人間は。」

チルチル「ここは好い處。」

おぢいさん「ああ、悪くはないよ、悪くはないよ。只、みんながお祈りをしてくれるともつと好いのだが。」

チルチル「でも、お父さんが、もうお祈をしなくても可いと言つたよ。」

おぢいさん「さうかな、さうかな。お祈をするので思ひ出すのだがなあ。」

おばあさん「さうだよ、さうだよ。何もかも此處は都合が好いのだよ。只、ちよいちよいお前達が来てくれさいすれば好いのだよ。チルチル、お前覺えておいてかえ、一番おしまひに私がおいしい林檎のタルトを焼いてあげたのを。」

*Tart. 饅頭の如き一種の食物。

チルチル「でも去年から林檎のタルトは僕ちつとも喰べないよ。今年には林檎がとれないし。」

おばあさん「まあ、さうかい。だが、此處には何時でもあるよ。」

チルチル「随分ちがつて居るんだなあ。」

おばあさん「え、違つて居るつて。どうしてさ。何も違つてゐやしないぢやないか。」

チルチル「おばあさんとおぢいさんの顔を順番に見て。」

「ああ、おぢいさん、變らないねえ、ちつとも變つて居ないよ。それからおばあさんも、ちつとも變つてゐないや。でも先よりか、ずつと綺麗だよ。」

おぢいさん「さうだらう、それは工合が好いのだからな。私達は

もう年をとらなくなつたのだ。だが、お前は大きくなつたな。どうして、なかなかしつかりして居るわい。御覽、あすこの扉の上に此の前つけた印がある。あれは萬聖節の時に測つたのだ。どれどれ、眞直に立つて御覽。」(チルチルが扉の前に立ちました。指四本だけ、これはえらい。)(ミチルも同じやうに扉の前に立ちました。それからミチルは、どうして、これは四本半だけ高くなつて居るぞ。いやはや、草が伸びるやうなものだ。どこまで大きくなるのやら。)

三〇 思ひ出の國中

チルチル (其處らを見廻して嬉しうに)「ほんたうに何も變つたも

*Soup.

のはないんだ。何もかも昔の儘なんだ。只みんな先よりか綺麗になつてゐるね。ああ大きな針の時計があらあ、あの針の尖を僕折つたつけなあ。」

おぢいさん「それから、ここにあるス^{*}ープ皿の縁もお前がかいたのだぞ。」

チルチル「それから扉の上の孔があらあ、錐を捜し出した時に僕があけたんだ。」

おぢいさん「どうして、お前は仲仲悪戯小僧だつたからなあ。それから私が居ない留守によく木登りをした梅の樹も此處にあるぞ。やはり實が綺麗になつて居るだらう。」

チルチル「でも先よりか、もつと綺麗だなあ。」

ミチル 「それから此處にもう先ゐた鶉がゐてよ。まだ歌を唄ふてせうか。」

かう言つて居る時、鶉は目をさまして、ありたけの聲で歌を唄ひ出しました。

おぢいさん 「ほら御覽、思ひ出してやると、すぐこの通りだ。」

チルチル (見ると鶉が眞青なので吃驚して) 「おや、あの鳥は青いぜ。あ、あれだよ、あれが妖女の所へ持つてゆく青い鳥なんだよ。それなのに、誰もあの鳥のゐる事を話してくれないんだもの。お、お、青い、青い、青い、青玻璃玉のやうに青いや。おぢいさん、おばあさん、あの鳥僕に下さいな。」

おぢいさん 「ああ、よからう、よからう。なあ、おばあさん。」

おばあさん 「いいとも、いいとも、私達が持つてゐたつて仕方がない。それは眠つてばかり居るのだからね。歌なんか、もう唄つたことはないのだよ。」

チルチル 「僕、籠の中に入れてやらう。おや、籠はどこへ行つたらう。さうさう、樹の蔭へ忘れて来た。」(樹の下へ駆けて行つて籠をとつて来て、鳥を中に入れました) 「では本當にこの鳥僕にくれるの。妖女のおばあさんが、どんなに嬉しがらうだらう。」
おぢいさん 「だが、この鳥はどうなるか知らないぞ。鳥も、もう騒ましい世間に出てゐることが出来なくなつてゐるかも知れないから。こつちの方へ吹く風があれば、それについて早速歸つて来るかも知れない。だが、まあ試して

見るが可い。さあ、鳥は暫くさうして置いて、今度は牝牛
を見せて上げよう。」

チルチル（蜂の巢を見つけて）「それから蜂はどうしてゐるの。」

おぢいさん「ああ、達者だよ。あちらの言葉では、もう生きては
ないのだが、何時もせつせと働いてゐるよ。」

チルチル（蜂の巢の近くへ行つて）「ああ、ああ、蜜の匂がする。蜂の巢
は随分重たいだらうな。花はみんな綺麗に咲いてゐる
なあ。それから、死んだ妹たちも皆ゐるの。」

ミチル「それから、お墓に埋つてゐる三人の弟たちは。」

かう言ひますと、大きさの違つた七人の子供達が、一人一人小家
ら出て來ました。

おばあさん「ほら出て來た、ほら出て來た。お前達が思ひ出して
やつたり、噂をしてやれば、すぐに小僧さんたち皆出て
來るのだよ。」

チルチルとミチルとは子供の方へ駆けてゆきました。子供達は
互にぶつかつたり、押合つたり、巴のやうにくるくる廻つて、嬉しが
つて、さやつきやつと聲を立てました。

チルチル「やあ、ピエロウ。」二人は髪を掴みあふ。「ねえ、また先のやう
に喧嘩しようか。それからロベエルだね。おい、ジャン、お
前、獨樂はどうしたい。やあ、マドレエヌに、ピエレットに、
ポオレイヌ、それからリケットも居る。」

ミチル「まあ、リケットちゃん。リケットちゃん。この子は、まだ
這ひ這ひしてゐるのね。」

- (五) Pierrette. (一) Pierrot.
- (六) Pauline. (二) Robert.
- (七) Riquette. (三) Jean.
- (四) Madeleine.

* Kiki.

おばあさん 「ああ、あれつきり大きくならないのだよ。」

チルチル (小犬が子供達の周囲できやんきやん啼いてゐるのを見つけて)

「やあキキだ。ポオリイヌの缺で尻尾を切つてやつたけな。こいつもちつとも變らないや。」

おぢいさん (宣告するやうに) 「さうだ。此處では何も變らぬのだ。」

チルチル 「それからポオリイヌの鼻の上のおできもまだあるぜ。」

おばあさん 「ああ、あれはとれないよ。どうしてやりやうもないのだからね。」

チルチル 「でも、みんな元氣な顔をしてゐるなあ。随分肥つて、かてかして、はち切れさうな頬べたをしてら。うまい物を喰べてゐるのだなあ。」

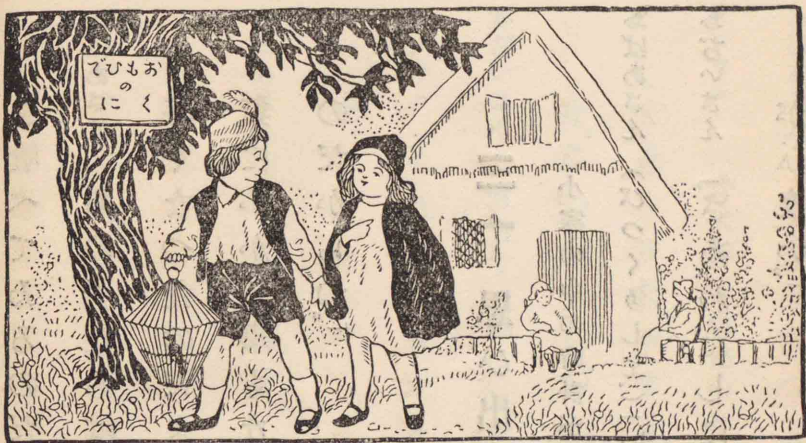
おばあさん 「あの子たちは生きてることを止めてから、ずっと好くなつたのだよ。もう何も怖い事はないし、決して病氣にかかる事もないし、心配なんてものがなくなつたのだからね。」

三一 思ひ出の國下

小家の中の時計が八時をうつ。

おばあさん (びつくりして) 「おや、どうしたのだらう。」

おぢいさん 「さあ、わたしにも分らないぞ。あれは時計の音にちがひなし。」



おばあさん「そんな筈はないがね。あれは今まで打つたことがないのだから。」

おぢいさん「それといふのが、私達は今少しも時間といふことは考へないからだ。誰か時間のことを考へた者があるか。」

チルチル「ああ、僕考へた。今、何時でせう。」

おぢいさん「さあ、確には言へない。時

間の習慣を忘れて了つたから。何でも八つ打つたから、あちらの人が八時といふのぢやなかつたかと思ふ。」

チルチル「光が僕を九時十五分前まで待つてゐるんだ。それは妖女のおばあさんの言付なんです。時間を大切に守らなければならぬのだから、僕歸らう。」

おばあさん「まあそんなことを言はずに、お夕飯の支度が出来てゐるからねえ。さあさあ、急いでテーブルを並べませう。うまいキャベツのスープもあるし、おいしい梅のタルトもあるし。」

皆してテーブルを出し、大皿や小皿を並べて、扉口の外へお夕飯の支度をしました。

(-) Table.
(-) Cabbage.

チルチル「ほんとに僕青い鳥は貰つたし、それにキャベツのス
ープなんか、もう随分久しくたべないんだ。暫く旅に出
てゐたものだから、そんなもの宿屋では出さないし。」

おばあさん「そら、もう出来たよ。お坐り、子供たち、急ぐんだと言
ふんだから、ぐづぐづしてゐてはいけません。」

ランプを點して、スープを並べました。おぢいさんとおばあさんと
孫達とは夕飯のテーブルを圍んで坐り、お互に押合つたり、臂で突
合つたり、嬉しさうに笑つたり、さやあきやあ言つたりしました。

チルチル（宿なし犬のやうにがつがつしながら）「ああ旨い、ああ旨い。
お代りを下さい。もつと。」と言ひながら匙をふりまはして、お皿
を叩いたりしました。）

おぢいさん「これこれ、靜にしなさい。お前は相變らず行儀が悪

いのう。お皿をこはして了ふぞ。」

チルチル（腰掛の上で半分立ちかけながら）「僕もつと欲しいんだ。も
つと。」（かう言ひながら、スープのお皿を掴んで手許に引寄せようとし
ますと、手が這つて、お皿をひつくり返しました。スープがテーブルの上
にこぼれて、流れ出して、皆の膝にかかる。皆が熱がつて、さやつさやつ
と叫びました。）

おばあさん「ほら御覽な、言はないことぢやない。」

おぢいさん（チルチルの頬をびしやりと平手で叩いて）「それ、これを遣
らう。」

チルチル（打たれて一寸よろよろしましたが、打たれた頬に手をあてて、嬉し
さうに）「ああ、おぢいさん、生きてゐた時分、よくこんな風
に僕を打つたけな。おぢいさん、僕なんだか好い心持で

しやうがない。おぢいさんに、だつこしたくなつた。」

おぢいさん 「よしよし、好けりや、もつと打つてやらう。」

この時、時計が八時半を打ちました。

チルチル (はつとして飛上りながら)、「八時半だ。」(匙を投出して)、「ミチル、もう時間だよ。」

おぢいさん 「まあまあ、もう少しいやね。お前達の家が火事ぢやないのだよ。めつたに逢へないんだから。」

チルチル 「ううん、もう駄目。光は随分深切なのだから、だから僕約束して來たんだ。さあ、ミチル、行かう。」

おぢいさん 「いやはや、生きてゐる人間といふものは小ぜはしない、うるさいものだ。」

チルチル (鳥籠を抱へて忙しく皆に握手をして廻つて)、「おぢいさん、さ

よなら。おばあさん、さよなら。みんな、さよなら。ピエロウも、ロベエルも、ポオリイヌも、マドレエヌも、リケツトも、それからキキ、お前にもさよなら。僕達もう居ることが出来ないやうな氣がするんだから。泣くんぢやないよ。おばあさん、僕達、またちよいちよい來るからね。」

おばあさん 「毎日でもお出でな。」

チルチル 「ああ、ああ、來られるだけ來るよ。」

おばあさん 「お前たちが思ひ出して、逢ひに來てくれるといふことは、私達のたつた一つの楽しみだし、それは何より嬉しいことなのだからね。」

おぢいさん 「私達は外に慰めはないのだ。」

チルチル 「早く早く。僕の籠は。僕の鳥は。」

おぢいさん (籠を渡してやりながら) 「いいかな、わしは請合ひはし

ないぞ、鳥の色が變つても。」

チルチル 「さよなら、さよなら。」

弟妹たち 「さよなら、チルチル。さよなら、ミチル。有平糖を忘れな

いで頂戴。さよなら。またいらつしやい。またいらつしや

い。」

皆はハンカチを振りました。この間にチルチルとミチルとはそろそろ出て行きました。けれどもまだ別離の言葉を皆言ひきらない中に、この幕の初と同じやうに濃い霧が一面におりて来て、聲がだんだん遠くなり、やがて、みんな霧の中に分らないやうに消えて、幕

が下りる時、チルチルとミチルとだけが、また榎の大きな樹の下に出て来ました。

チルチル 「ミチル、此處だよ。」

ミチル 「光はどうしたのでせう。」

チルチル 「どうしたらう。」(鳥籠の中の鳥を覗きながら) 「やあ、鳥はも

う青くなくなつた。黒くなつて了つた。」

ミチル 「兄さん、手を引かれませうよ。あたし怖いわ。あたし寒

いわ。」

——(幕)——

(楠山正雄譯—青い鳥)

新訂新撰國語讀本卷二終

大正十四年四月二十一日
教育部省檢定中國語科用校

大正十三年十月二十四日印刷
大正十三年十月二十七日發行
大正十四年一月十七日訂正印刷
大正十四年一月二十日訂正發行

新訂新撰國語讀本(全十冊)

定價	卷一、二、各金四拾壹錢	卷三、四、各金七拾錢
臨時定價	卷五、六、各金參拾七錢	卷七、八、各金六拾參錢
臨時定價	卷九、十、各金參拾參錢	卷十一、十二、各金五拾六錢



編者	佐々政一
補修者	大町芳衛
補修者	武島又次郎
補修者	杉敏介
印發行兼者	東京市神田區錦町二丁目十番地 株式會社 明治書院 取締役社長 鈴木友三郎

發行所

東京市神田區錦町二丁目
(振替口座東京四九九二番)

株式會社

明治書院

電話神田(25) 一四一四番

